

# 飛鳥・藤原宮発掘調査概報 21



1991年5月

奈良国立文化財研究所

## 目 次

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 1990年発掘調査地一覧表           | 2  |
| I 藤原宮の調査                | 4  |
| 1 内裏東外郭・東方官衙地区の調査（第61次） | 5  |
| 2 西方官衙地区の調査             | 10 |
| A 第63-5次                | 10 |
| C 第63-10次               | 12 |
| E 第60-15次               | 17 |
| G 第60-20次               | 18 |
| B 第63-8次                | 10 |
| D 第63-2次                | 15 |
| F 第60-16次               | 17 |
| II 藤原京の調査               | 19 |
| 1 左京四条三坊の調査（第63-7次）     | 20 |
| 2 左京九条四坊の調査（第60-17次）    | 23 |
| 3 右京七条一坊の調査             | 26 |
| A 第63次                  | 26 |
| C 第63-6次                | 30 |
| B 第63-4次                | 29 |
| 4 右京九条三坊の調査（第63-3次）     | 31 |
| 5 本薬師寺の調査（1990-1次）      | 33 |
| 6 その他の調査                | 36 |
| A 右京二条二坊（第60-19次）       | 36 |
| B 右京二条二坊（第60-18次）       | 38 |
| C 右京二条二坊（第63-1次）        | 38 |
| D 右京二条一坊（第63-9次）        | 38 |
| III 飛鳥地域の調査             | 39 |
| 1 山田道第2・3次調査            | 40 |
| 2 石神遺跡第9次調査             | 53 |
| 3 坂田寺第6次調査              | 61 |
| 4 山田寺第8次調査              | 72 |
| 5 その他の調査                | 87 |
| A 石神遺跡1990-1次           | 87 |
| B 飛鳥寺1989-5次            | 88 |
| C 山田道周辺1990-1次          | 88 |

写真図版

1990年発掘調査地一覧表

※本書に未収録

| 遺跡・調査次数        | 調査地区                   | 面 積                  | 調査期間                      | 調 査 地                                | 所有者等            | 備 考    |
|----------------|------------------------|----------------------|---------------------------|--------------------------------------|-----------------|--------|
| 藤原宮・京<br>60-15 | 6AJL-F                 | 190 m <sup>2</sup>   | 90. 1. 16<br>~90. 1. 31   | 橿原市四分町 298 他                         | 橿原市             | 団地建設   |
| 60-16          | 6AJM-A                 | 70 m <sup>2</sup>    | 90. 1. 12<br>~90. 1. 18   | 橿原市四分町 278 ~ 6 他                     | 橿原市             | 下水道敷設  |
| 60-17          | 6AMA-P                 | 807 m <sup>2</sup>   | 90. 1. 18<br>~90. 3. 26   | 橿原市南山町 490 他                         | 橿原市             | 道路建設   |
| 60-18          | 6AJJ-A                 | 8 m <sup>2</sup>     | 90. 2. 6                  | 橿原市醍醐町 117 ~ 6                       | 河原田久            | 住宅改築   |
| 60-19          | 6AJQ-E                 | 90 m <sup>2</sup>    | 90. 3. 20<br>~90. 4. 2    | 橿原市醍醐町 146 ~ 11                      | 大西君子            | 住宅新築   |
| 60-20          | 6AJH-P・Q               | 230 m <sup>2</sup>   | 90. 3. 22<br>~90. 4. 2    | 橿原市高殿町                               | 橿原市             | 下水道敷設  |
| 61             | 6AJF-C・D               | 1,100 m <sup>2</sup> | 90. 4. 25<br>~90. 8. 29   | 橿原市高殿町 361,<br>362, 363              | 国有地             | 計画調査   |
| 63             | 6AJH-R                 | 1,270 m <sup>2</sup> | 90. 3. 27<br>~90. 5. 16   | 橿原市高殿町 7 他                           | 橿原市             | 改良住宅建設 |
| 64 案           | 6AJQ-A・B<br>6AJS-S・T・U | 2,600 m <sup>2</sup> | 90. 11. 27<br>~91. 4. 4   | 橿原市醍醐町 313 ~ 1 他                     | 醍醐町土地<br>区画整理組合 | 区画整理事業 |
| 65 案           | 6AJP-P・Q               | 1,126 m <sup>2</sup> | 91. 2. 12<br>~91. 3. 28   | 橿原市醍醐町 333 ~ 1                       | 岩城彰久            | 店舗建設   |
| 63-1           | 6AJJ-B                 | 60 m <sup>2</sup>    | 90. 4. 3<br>~90. 4. 9     | 橿原市醍醐町 115 ~ 2                       | 木村正雄            | 宅地造成   |
| 63-2           | 6AJF-Q                 | 36 m <sup>2</sup>    | 90. 4. 9<br>~90. 4. 11    | 橿原市櫛手町 175 ~ 10                      | 忍 幸一            | 住宅新築   |
| 63-3           | 6AJQ-E                 | 547 m <sup>2</sup>   | 90. 4. 23<br>~90. 5. 31   | 橿原市城殿町 433                           | 奈良技能開発センター      | 体育館建設  |
| 63-4           | 6AJH-U                 | 12 m <sup>2</sup>    | 90. 5. 21                 | 橿原市上飛駒町 69 ~ 3                       | 橿原市             | 草地整備   |
| 63-5           | 6AJG<br>-R・S・T         | 152 m <sup>2</sup>   | 90. 5. 21<br>~90. 5. 24   | 橿原市四分町 284 ~ 4 他                     | 橿原市             | 道路拡幅   |
| 63-6           | 6AWH-P                 | 120 m <sup>2</sup>   | 90. 7. 13<br>~90. 7. 25   | 橿原市飛驒町 73 ~ 2                        | 橿原市             | 改良住宅建設 |
| 63-7           | 6AJB-J                 | 500 m <sup>2</sup>   | 90. 7. 13<br>~90. 9. 1    | 橿原市下八鈴町 63 ~ 1                       | 森田勇信            | 駐車場造成  |
| 63-8           | 6AJG-R・S               | 1,262 m <sup>2</sup> | 90. 8. 10<br>~90. 10. 22  | 橿原市四分町 286, 320,<br>320 ~ 1, 320 ~ 2 | 鳥山孝宣            | 倉庫建設   |
| 63-9           | 6AJP-M                 | 48 m <sup>2</sup>    | 90. 11. 26<br>~90. 11. 29 | 橿原市醍醐町 226 ~ 5                       | 上田 春            | 住宅新築   |
| 63-10          | 6AJG-R                 | 146 m <sup>2</sup>   | 90. 12. 11<br>~90. 12. 21 | 橿原市四分町 290 ~ 1                       | 鳥山典秀            | 倉庫建設   |
| 63-11          | 6AJJ-B                 | 82 m <sup>2</sup>    | 91. 1. 10<br>~91. 1. 16   | 橿原市醍醐町 105 ~ 7                       | 西川久雄            | 資材置場   |
| 63-12          | 6AJH-S                 | 580 m <sup>2</sup>   | 90. 12. 25<br>~91. 2. 22  | 橿原市高殿町                               | 橿原市             | 改良住宅建設 |

| 遺跡・調査次数          | 調査地区             | 面 積                  | 調査期間                     | 調査地                     | 所有者等  | 備 考   |
|------------------|------------------|----------------------|--------------------------|-------------------------|-------|-------|
| 塚<br>63-13       | 6AJB-B           | 135 m <sup>2</sup>   | 91. 3. 18<br>~91. 4. 3   | 橿原市膳大町 189-3            | 福本千代野 | 住宅新築  |
| 山田道<br>第2次       | 6AMC-U<br>6AMH-F | 973 m <sup>2</sup>   | 90. 1. 6<br>~90. 4. 7    | 高市郡明日香村奥山               | 奈良県   | 道路拡幅  |
| 山田道<br>第3次       | 6AMC-N<br>6AMH-F | 820 m <sup>2</sup>   | 90. 10. 1<br>~90. 11. 27 | 高市郡明日香村奥山               | 奈良県   | 道路拡幅  |
| 山田道周辺<br>1990-1次 | 6AMD-H           | 7 m <sup>2</sup>     | 90. 4. 12<br>~90. 4. 13  | 高市郡明日香村<br>飛鳥 438-1     | 阿蘇喜樹一 | 納屋改築  |
| 石神跡<br>第9次       | 6AMD-R           | 1,200 m <sup>2</sup> | 90. 7. 16<br>~91. 4. 8   | 高市郡明日香村飛鳥<br>東六反田 272-1 | 人鳥正男  | 計画調査  |
| 石神跡<br>1990-1次   | 6AMD-T           | 60 m <sup>2</sup>    | 91. 1. 28<br>~91. 2. 15  | 高市郡明日香村飛鳥 660           | 大鳥昌司  | 農小屋新築 |
| 飛鳥寺<br>1980-5次   | 5BAS-E           | 12 m <sup>2</sup>    | 90. 2. 26<br>~90. 2. 27  | 高市郡明日香村飛鳥 623           | 島田康知  | 住宅改築  |
| 坂田寺<br>第6次       | 5BST-A           | 275 m <sup>2</sup>   | 90. 5. 28<br>~90. 8. 9   | 高市郡明日香村<br>坂田字古宮        | 奈良県   | 公園整備  |
| 本薬師寺<br>1990-1次  | 6BMY-C           | 3 m <sup>2</sup>     | 90. 8. 8<br>~90. 8. 9    | 橿原市城殿町 288-1他           | 大字共有地 | 建物増築  |
| 山田寺<br>第8次       | 5BYD-L           | 800 m <sup>2</sup>   | 90. 8. 27<br>~90. 12. 19 | 桜井市山田                   | 国有地   | 計画調査  |

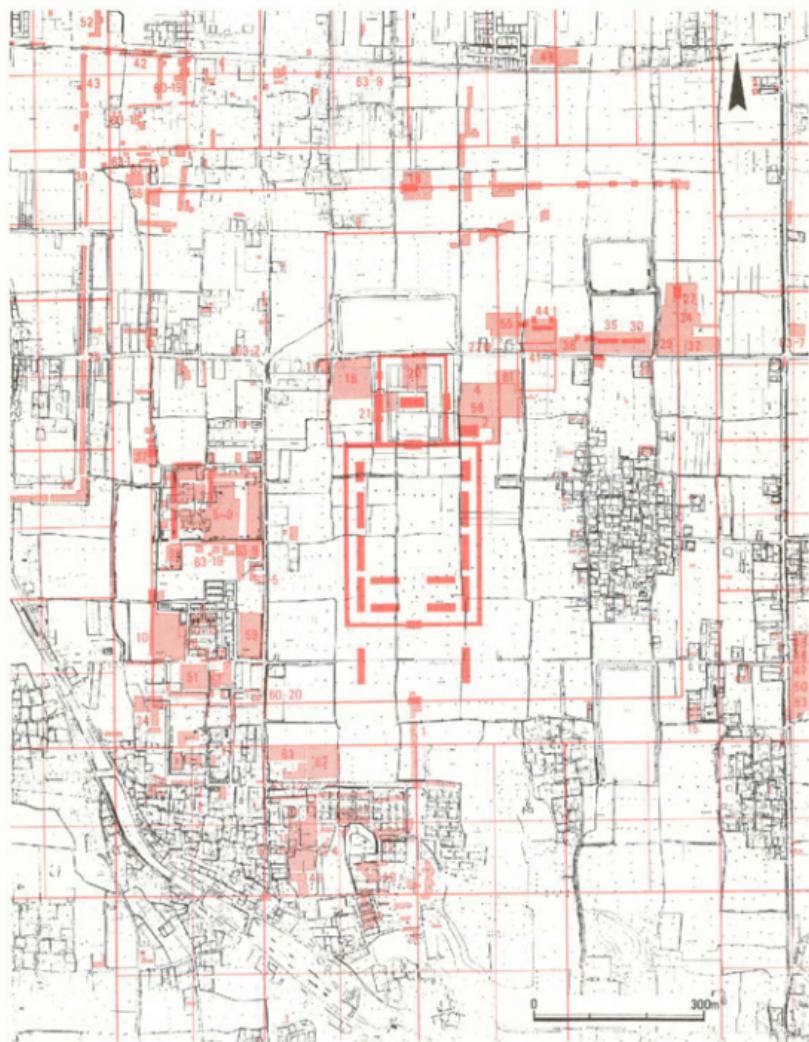
### 凡 例

- 本書は、奈良国立文化財研究所飛鳥・藤原宮跡発掘調査部が、1990年1月から同年12月までに行った藤原宮跡・藤原京跡および飛鳥地域の発掘調査の概要報告である。各調査の報告は、原則として各現場の担当者が行った。
- 発掘調査地一覧表には、1990年度の調査地をすべて示した。
- 発掘遺構図に用いた座標値は、平面直角座標系第VI座標系による座標値であり、遺構図では「-」符号を省略している。高さはすべて海拔高で示す。
- 本文中では『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』を『報告』、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』を『概報』と省略した。
- 遺構図には、個々に遺跡あるいは大地区割りごとの一連番号を付け、番号の前に、SA(築地・壠)、SB(建物)、SC(回廊)、SD(溝・濠)、SE(井戸)、SF(道路)、SK(土坑)、SS(足場)、SX(その他)などの分類記号を付いた。遺構番号には仮番号で示したものがある。
- 7世紀の土器の時期区分は飛鳥 I ~ V を表す。詳しくは『報告II』p.92~100を参照されたい。

表紙カット：山田寺山上銅板五尊像（原寸）

裏表紙カット：坂田寺出土海獸葡萄鏡（原寸）

## I 藤原宮の調査



藤原宮周辺調査位置図（数字は次数）

## 1 内裏東外郭・東方官衙地区の調査（第61次）

（1990年4月～8月）

この調査は藤原宮の大極殿院・内裏の東外郭と、東方官衙地区の様相を明らかにするため、第58次調査に引き続いて行ったものである。当調査区は第4次調査区の北側に接し、また第41次調査区の西南約40mの位置にあたる。調査は当初東西40m・南北25mのトレーニングを設定して行い、調査の進展にともない、調査区の東南隅に東西7m・南北14mの拡張区を設けた。

当調査区の西南方に接する第2・4・58次調査区では一本柱塀と大溝の大極殿院外郭の東を限る施設の様相が明らかとなっているが、その内部は第2次調査区で検出した礎石建ち建物以外には建物ではなく、空閑地という状況を示している。一方の東方官衙の地域では、第41・44・55・58次調査の結果、大極殿院・内裏東外郭部の東側に南北に並ぶ3個の官衙ブロックの存在が明らかになっている。北方の官衙ブロックではブロック内の建物の建て替えが行われ、建物配置の変化に伴ってブロック内が細分されたことが判明している。また、この地域には藤原宮の時期の遺構だけでなく、藤原宮直前・平安時代の遺構群が存在する事も判明している。

### 遺 構

今回検出した遺構は弥生時代から中世にいたるものであるが、主要なものは藤原宮期と平安時代の遺構である。検出した主な遺構は掘立柱塀・溝・建物・土坑等である。

藤原宮期の遺構 検出した主な遺構は塀・建物・溝・橋脚状遺構・土坑などである。

調査区の西端の南北塀SA865は大極殿院・内裏の外郭の東を限る塀であり、今回9間分を確認した。柱間寸法は10尺（約3m）等間で、柱掘形は東西2.5m・南北1.5mの巨大なものである。

SA865の東西両側に、3m間隔で対応してある2条の柱列を今回11間分を確認した。これらの柱列は第58次調査区からも続き、妻柱もないため長大な建物の両側柱とは考えがたく、また、塀の建て替えとしても柱筋が通りすぎる。長

距離にわたって対応して続くことから考えれば、外郭堀SA865に伴う足場穴とすることができる。足場穴とすれば西側の掘形がSA865の掘形を切っているため、SA865の解体時の足場穴SS6900と考えられよう。足場穴の柱間寸法は約2.25mで、柱掘形は一辺約0.4mである。

SA865の東約3mの溝SD869は幅約1.5m、深さ0.6mで、第58次調査区から総延長約80m確認しており、堀SA865の雨落溝の可能性もあるが、約60m北側の第55次調査区までは延びていない。また、SS6900の東側の柱掘形はSD869の堀上を切っているため、SA865の廃絶以前に埋め戻されている。

南北溝SD105は最大幅5m・深さ0.7m、藤原宮東半地域の基幹排水路である。最上層は埋め立てられている。下層には数度の補修の痕が認められるため、通常は3~4mの幅であったものと考えられる。下層から瓦・土器・木簡が出土している。

橋脚状遺構SX861はSD105の南半の両岸にある柱穴で、大小の柱穴が交互に並び、大きい柱穴だけでもみると第58次調査区から柱間寸法約2.6mで8間分検出している。梁行は約4.2m。南北21mという規模からみて橋とは考え難い。SX861の南15m隔てたところに同様の規模のSX6665が第58次調査で検出されている。廐の造構とする考え方もあるが、その占める位置からすると疑問が残る。

SD850は幅2.4m・深さ0.7mの南北溝で、東方官衙地区の西を限る溝である。SD105と同様に最上層は埋め立てられている。下層から瓦・土器・木簡が出土している。西側のSD105との間約17mは宮内道路と考えられる。

調査区の東端の南北堀SA6630Bは南北に3個並ぶ官衙ブロックのうちの真中の区画の西を限る堀であり、今回12間分を検出した。柱間寸法は約2.75m等間であり、北端では柱間が一つとんで広くなるところがある。柱掘形は一辺1mをこえる大型のものである。柱はすべて西側に抜かれており、北から2番目の柱穴では柱が横たわった状態で残存している。中央の官衙ブロックが東西66m・南北72mの規模であることは第58次調査などの成果で確認されていたが、柱間の広くなるところはSA6630Bの南北のほぼ真中にあたっており官衙の西の出入口の可能性があろう。堀の西1.2mにある幅0.8mの南北溝SD6899はこの堀の西

側の雨落溝と考えられる。

また、南北塀SA6630AはSA6630Bと重複し、先行する塀であるが、柱間寸法はSA6630Bより若干短く約2.6mと考えられ、柱痕跡も存在しない。柱掘形も一辺1m弱とSA6630Bに比して一回り小さい。これらA・B 2時期の塀があることは第41次調査で検出した官衙の北を限る施設として1.5m隔てて2条の東西塀SA3632・3634があり、それらと対応するものであろう。第41次調査の場合でも南側のSA3634には柱痕跡がなく、かつまた、SA3632は東で東限の南北塀SA3633と鉤の手に連なっているのに対し、SA3634は対応する南北塀が伴っていない。これらの事から、SA6630A・3634の2条の塀は柱掘形は掘ったものの、計画変更により、柱を建てる前に埋め戻されたものと考えることができよう。

建物SB6895はSA6630の東2mにある梁行2間の東西棟で、今回その西妻柱筋を検出しただけであるが、SA6630Bと柱筋を揃えるため、官衙ブロック内の建物と考えられる。

平安時代の遺構 検出した主な遺構は溝・建物などである。

溝SD852は幅約2m・深さ0.5mの南北溝で、その両岸は人頭大の自然石で粗く護岸している。

SD105の東岸の南北棟建物SB6902は2間×2間で、柱間寸法は桁行2m・梁行1.5mの小規模な建物である。第58次調査区で検出した塀でつながる南北棟SB6657・6659・6662とはほぼ柱筋を揃えるため、これらと一連の建物であろう。

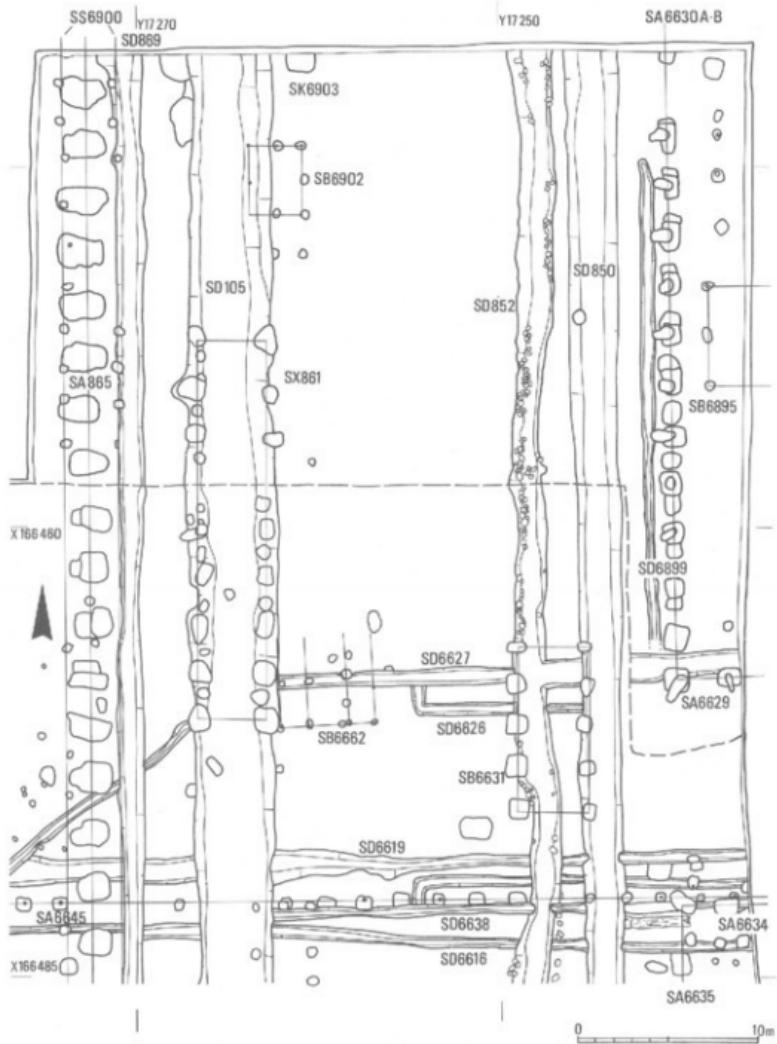
#### 遺 物

瓦・土器（弥生土器・土師器・須恵器）・土製品・木器・木製品・木簡・金属製品・石製品が出土したが、全体に少量である。

土器はSD105・850・869などを中心に出土しており、墨書き土器（習書）1点・円面鏡1点・転用鏡が2点出土した。土製品は土馬がSD105から出土した。瓦は軒丸瓦5点・軒平瓦11点・面戸瓦8点・熨斗瓦1点が出土した。

木器・木製品はSD105から曲物の底板・側板が出土した。

金属製品には包含層から出土した金銅製の鈴がある。石製品にはSK6903から出土した古墳時代の碧玉製の管玉、SD850から出土した砥石がある。



第61次調査構配図

木簡は溝SD105から24点（うち削屑5点）、SD850から32点（うち削屑4点）、合わせて56点出土した。その主なものの釈文を以下に掲げる。

- ① 己亥年九月七日
- ② • 吉備中國下道郡
  - ・矢田里矢田マ刀祢□ (以上SD105)  
〔李カ〕
- ③ • 諸陵司 召土師宿祢広庭 上簡宿祢國足
  - ・土師宿祢大海□四人
- ④ • 備前国
  - 磨郡  
〔珂カ〕 ——
  - ・他田里□家一ノ
- ⑤ 中務省牒□守省 (以上SD850)  
〔留カ〕

#### まとめ

今回の調査の結果、内裏東外郭の東で南北に3個並ぶ官衙ブロックのうち、中央ブロックでは西を限る塙には建て替え、もしくは計画変更があることが重複関係から確認することができた。この塙の南北のほぼ中央には、柱間が広く、山入口と想定できる場所が確認できたことも大きな成果とすることができる。残念ながらこの塙は調査区の東端にあり、官衙内の建物も西側柱を検出した1棟を確認するにとどまった。官衙ブロックの内部構造については、今後の調査の進展を待ちたい。

平安時代の遺構は南北溝を除き、顕著なものはなかったが、第41次調査区にこの時期の整然とした配置をとる建物群があり、宮の西北隅の第36次調査で出土した平安時代初頭の「弘仁」年間の紀年をもつ木簡に記載された「宮所庄」と関連があると考えられる小字「宮所」が調査区の南にあるため、荘園の一部と考えられよう。

## 2 西方官衙地区の調査（第63-5・8・10次等）

本年、藤原宮西方官衙地区の調査は、第63-2次を除き鴨公小学校の南に接した地域で行った。周辺は、小学校新築に伴う第5～9次調査（報告2）をはじめ、幼稚園増設（第33次、概報12）、そこへの進入路新設（第54-9次、概報18）、進入路南の家屋新築（第60-3次、概報20）、倉庫新築（第58-2次、概報19）などの工事に伴う事前調査によって、藤原宮期およびその直前の時期の遺構の状況が明らかになりつつある地域である。今回実施した調査は、第63-5次調査が第54-9次調査の東端から南、第63-8次調査は第54-9・第58-2・第63-5および第27-9次調査の中間、第63-10次調査は第58-2次調査と第60-13次調査の間に各々位置する。

### A 第63-5次調査

（1990年5月）

この調査は市道拡幅に伴う事前調査として、橿原市四分町で実施した。調査地の制約により、調査対象地を南部と北部に分け、各々南調査区（3m×27m）、北調査区（2.5m×33m）として南北に細長い調査区を設定した。

南調査区は、宮内先行条坊である五条大路が想定できる位置に設けた。後世の削平や擾乱が著しかったが、五条大路南側溝の可能性がある東西溝1条を断面で確認できた。北側溝は南調査区からはずれるため未確認。このほか、南調査区の北端で幅5m、深さ1mの古墳時代の東西溝1条を確認した。北調査区は中世の素掘り溝を検出しただけで、藤原宮に関連する遺構は検出できなかった。

### B 第63-8次調査

（1990年8月～10月）

この調査は倉庫新築工事に伴い橿原市四分町で実施した。当初、東西40m・幅12m、南北46m・幅5mのL字形の調査区を設定して調査を開始したが、遺構の状況によって拡張を何度も行ったため、最終的な調査区の総面積は1262m<sup>2</sup>

に達した。

調査区の基本的な層序は、耕土・床土・灰褐色土（包含層）・淡灰色粘土であるが、調査区西部では淡灰色粘土の上に茶褐色粘土がのっていた。藤原宮期および宮直前の遺構は、淡灰色粘土ないし茶褐色粘土上面で検出した。調査区南部の南北トレンチ部では、灰褐色土の下に灰色ないし暗灰色粘土の弥生土器包含層があり、その直下の黄褐色粘土層上面で弥生時代の遺構を検出した。

検出した主な遺構は、掘立柱建物3棟、掘立柱塀2条、井戸1基、土坑、溝などである。また、調査区南部では、下層で弥生時代の流路と環濠を発掘した。以下、主要な遺構について時期別に述べる。

#### 藤原宮期およびその直前の時期の遺構

掘立柱建物SB6991は、梁間2間（3.0m、10尺等間）、桁行5間の東西棟。柱間は、2.7m（9尺）等間か、あるいは中央の間だけ3.0m（10尺）と広いかも知れない。柱掘形は一辺約0.8～1.0mの方形で、深さ0.4m。柱はすべて抜き取っている。

掘立柱建物SB6997は、梁間2間・桁行4間の南北棟建物。柱間はともに、2.25m（7.5尺）等間である。柱掘形は長辺が1～1.2mの長方形で、深さ0.4m。柱抜き取り穴のあるものと柱痕跡を残すものがある。

掘立柱建物SB7001は、梁間2間（2.4m、8尺等間）・桁行4間（2.7m、9尺等間）の南北棟。柱掘形は、一辺0.6mほどの方形だが、南妻の柱穴は東西が0.8～1mの長方形である。深さは0.2～0.3mと浅い。柱はすべて抜き取られていた。北妻の柱筋がSB6991の南側柱筋と揃い、しかもSB7001の東側柱筋とSB6991の西妻筋との距離は6.0m（20尺）である。

掘立柱南北塀SA6985は、10間分を検出した。南北はともに調査区外に延びるが、北の第54～9次調査区、南の第27～9次調査区ではともに延長部分は確認されていない。柱掘形は一辺0.6～1mと不揃いで、深さ約0.2mしか残らず、柱穴の抜けるところもある。柱間は、北6間が2.25m（7.5尺）、その南2間は1.8m（6尺）、東西塀SA7000が取り付く南と北の柱間は北が2.4m（8尺）、南が2.1m（7尺）とまちまちである。取り付き付近に通路を設けたため変則的になったのだ

ろうか。SB6991と重複しそれより古い。

掘立柱塀SA7000は、SA6985に取り付く東西塀。17間分を検出した。東はSA6985に取り付くが、西は調査区外に延びる。柱掘形は一辺0.6~0.8mの隅丸方形。深さは0.3~0.4mのものが多いが、西の方では0.8mと深いものがある。

井戸SE6990は、検出面での掘形径2.4×2.2mの井戸。井戸枠はすべて抜き取られていた。深さは1.8mである。SB6991と重複し、これより古い。抜取り穴から「益」と針書きした土師器杯Cなどの上器や木器が出土した。

#### 弥生時代の遺構

流路SD7014は、沼地状になった東西方向の流路。黒灰色粘土が堆積し、弥生時代後期の土器を多量に出土した。特に西端では、完形の土器がまとまって出土した。SX7012とSX7013は、このSD7014の北岸にある不整形な窪みやピット群。トンネル状になるものや中に木片を遺存するものがあったので、川岸に生えていた樹木の根が腐ってできたものと思われる。

SD7017~7019は、互いに連結する素掘り溝。SD7017とSD7018は幅約2.5m・深さ0.8mの断面U字形、SD7019は幅約1.5m・深さ0.6mの断面V字形の溝である。3条の溝はともに埋土の大半が砂であり、かなりの流量で水が流れていることを推測させる。現地形では北西が低くなるので、SD7017とSD7018が集めた水をSD7019によって排水したのだろう。弥生時代後期の中頃から終りにかけての土器が出土した。

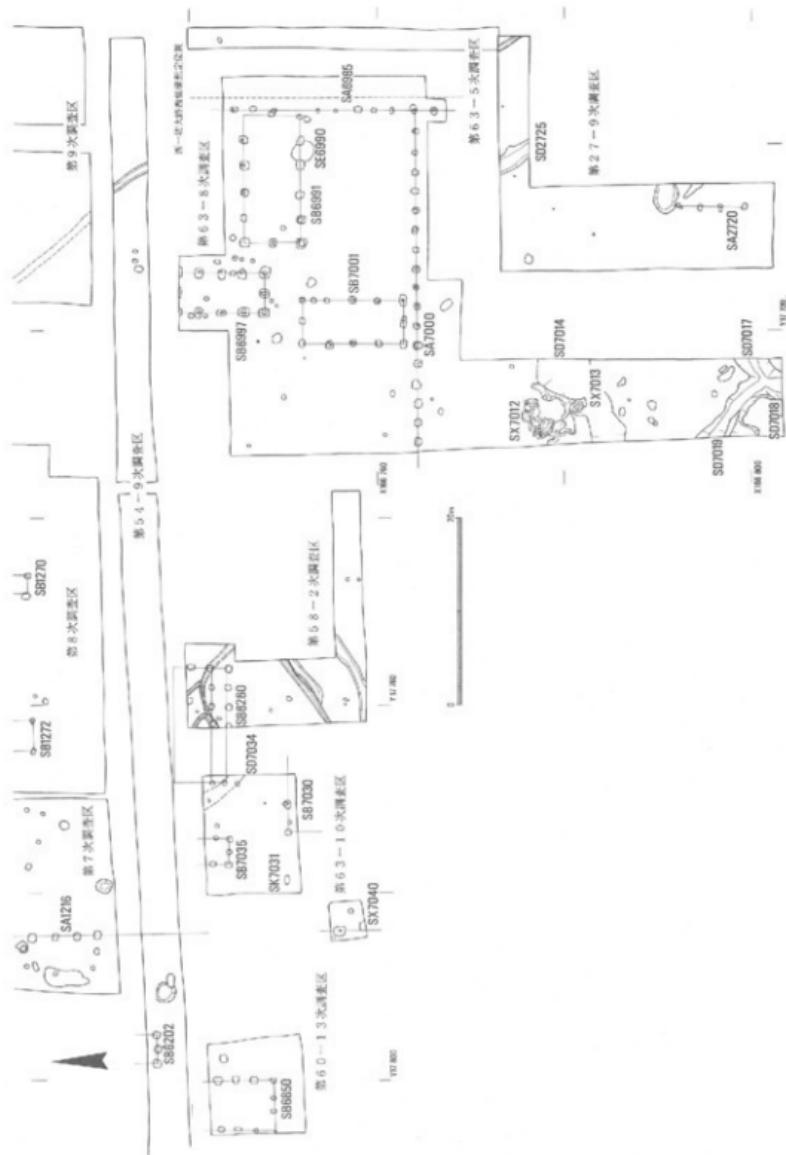
#### 出土遺物

土師器・須恵器・弥生土器などの土器のほか、ごく少量の瓦や木器がある。

### C 第63~10次調査

(1990年12月)

この調査は倉庫新築工事に伴い樋原市綱手町で実施した。調査は、東西13m・南北10mの調査区を設定し、第58~2次調査で検出した掘立柱東西棟建物SB6260の西延長の確認を目指した。さらに、この南西にも東西4m・南北4mの小調査区を設け、第5~9次調査で確認している宮内先行条坊に伴う掘立柱南北



西方官衙地区遣構配置図

塙SA1216の確認を企図した。

調査区の層位は、耕土・床土・灰褐色土・茶褐色粘土で、地山の茶褐色粘土の上には一部古墳時代の遺物を含む灰色粗砂および暗灰褐色砂質土がのる。遺構は、茶褐色粘土ないし灰色粗砂、暗灰褐色砂質土の上面で検出した。

検出した主な遺構は、掘立柱建物2棟のほか、柱穴、土坑、溝である。

掘立柱建物SB7035は、梁間2間、桁行2間以上の南北棟。柱間は1.5m(5尺)等間。柱掘形は一辺0.6m、深さ0.4mと小型である。側柱筋が藤原宮直前のSA1216と平行し、その東約7mにあることから、それと同時期と推定する。

掘立柱建物SB6260は、第58-2次調査で検出した南庇付東西棟。今回、庇と南側柱の西端の柱穴を検出し、桁行が柱間2.1m(7尺)等間の6間であることが確定した。藤原宮造営直前のものであろう。

このほか、調査区南東隅で検出した比較的大型の柱穴2個(SB7030)は、柱間約3m(10尺)ある。藤原宮西方官衙の建物の一部である可能性がある。また、調査区北西隅の斜行溝SD7034は、幅1.4mあり、古墳時代前期の土器を少量含む。

西南調査区では、掘立柱南北塙SA1216の南延長上で、大型の柱穴SX7040を検出した。SA1216も今回の調査区まで延びているとみてよいだろう。

#### 出土遺物

土師器・須恵器が少量出土した。土師器には古墳時代のものが含まれる。

#### 西方官衙地区調査(A~C)のまとめ

① SA7000は、第5~7次調査で検出した、宮内先行条坊に伴う掘立柱東西塙SA1215と59m(200尺)を隔てる。これに接続するSA6985は、SA1215の西端に接続する掘立柱南北塙SA1216と97.5m(330尺)を隔て、今回検出した10間分の内、北6間の柱間2.25m(7.5尺)は、SA1215のそれと同じである。従って、SA6985とSA7000は、SA1215・1216と一連の遺構であり、藤原宮直前の先行条坊と関連した区画施設と推測できる。今回検出することはできなかったが、SA6985の東約2mには、先行条坊の西一坊大路西側溝の存在が推定されるから、

この区画は北を先行条坊五条条間路、東を西一坊大路に接した、東西330尺×南北200尺の区画に復元できる。この時期の他の遺構としては、SE6900がある。SB6991建設時には廃絶されており、枠の抜き取りから飛鳥IVの土器が出土したことから、SE6900も藤原宮直前におくことができよう。建物としては、南北棟SB6997、SB6260、SB7035がある。

② 藤原宮西方官衙の遺構にはSB6991、SB7001、SB7030がある。SB6991と7001は、柱筋を揃える点や両者の間隔が20尺という完数で割り付けられていることなどから、同時に建てられた一組の建物と考える。これらの建物はSB7030が柱間10尺とする以外は小規模なものであり、西方官衙地区には長大な建物のほかにこのような小規模建物も付隨していたことが明らかにできた。

③ 弥生時代の遺構は、四分遺跡の一部をなすものと推定されるが、溝SD7017～7019は、この遺跡の集落地区の北限を画す環濠の可能性がある。

#### D 第63－2次調査

(1990年4月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、橿原市繩手町で行ったものである。調査地は醍醐池の西方で藤原宮北西部にあたり、内裏西外郭を限る南北塀SA1670の西約165mにある。調査地周辺では、第8-1・18-2・23-1・27-6・27-11・29-2・37-17・48-17・58-3・58-4・58-11次の諸調査を行ってきた。このうち第58-11次調査では、宮内先行条坊の四条条間路と西二坊間路の交差点を検出している(概報19)が、醍醐池の西側一帯は概して後世の削平がひどく、これ以外では7世紀代の顯著な遺構を検出していない。中世の遺構としては、第27-6次調査で14世紀後半の集落に伴う環濠らしき溝を検出している(概報10)。今調査は藤原宮期の遺構の遺存状況の確認を主目的として、南北12m・東西3mの調査区を設定した。

調査区の基本層序は、上から順に耕土・灰黒褐色砂質土・黒褐色砂質土・黃灰色砂質土があり、灰黒褐色砂質土(地山)の上面で遺構を検出した。検出した主要な遺構は、東西溝2条、南北溝1条である。

SD6880は東西溝で、幅1.6m・深さ15cmである。多量の14世紀代の遺物が出土した。内訳は、土師器の大皿43点・小皿93点・羽釜6点、瓦器椀40点、少量の須恵器壺・甕、少量の漆膜・布・板の断片である。土師器・瓦器には完形品が多く、皿類の多くは重ねられた状態で出土した。まとめて投棄されたのであろう。SD6881は東西溝で、幅1.6~2.2m、深さ17cmである。遺物が出土せず時期不明である。SD6882はSD6880・6881より古い南北溝で、幅0.4~0.8m、深さ7cmである。少量の土師器甕・羽釜、弥生土器が出土した。

当調査地は藤原宮の西北部にあたる位置にありながらも、藤原宮期の遺構は検出されなかった。周辺の調査地の状況からみて、すでに削平されたのである。一方、14世紀の溝SD6880が、第27-6次調査で検出された14世紀後半の溝や通路と共に、一つの集落を構成する可能性があり注目される。中世集落の環濠は淨御原宮推定地（概報11）・41-15次（概報16）・47次（概報17）・60-8次（概報20）でも検出しており、廃都後の土地利用の重要な資料である。



第63-2次調査位置図・遺構配図 (1 : 150)

## E 第60-15次調査

(1990年1月)

この調査は四分団地建て替えに伴う事前調査として、樋原市四分町で行ったものである。調査地は藤原宮の西南隅にあたり、第10次調査（報告Ⅱ）の東、第26次調査（概報9）の北に接する。宮西方官衙の遺構が予想され、また弥生時代の四分遺跡にも当たる地点である。発掘面積は約150m<sup>2</sup>。

床土下の薄い茶ないし灰褐色砂質土層を除去するとすぐに遺構面が現われる。それは基本的に弥生の包含層である黒褐色砂質上層の上を薄く覆う黄褐色粘質土面である。検出した遺構は南北方向の溝1条、掘立柱建物2棟および小さな土坑で、弥生時代の溝・土坑は黒褐色土を一部掘り下げた地山面で検出した。

南北溝SD6933は幅3.5m、深さ20~25cmほどの素掘り溝で、発掘区の中央を西に振りながら北流する。埋土から須恵器片が出土したが、年代は特定しがたい。建物のうち1棟SB6931は西南部にあり、2×2間の南北棟、柱間は桁行方向が2.4m、梁間が1.5mである。他の1棟SB6932は北壁沿いに東西に並ぶ3個の柱穴で、建物規模は不明。以上は藤原宮期のものであろう。

東北部の5×5mの範囲で弥生時代の包含層を掘り下げ、黄灰色砂質土地山面で弥生時代の遺構を検出した。西端部で南北溝の東岸を検出したが、これは上層の溝とほぼ同位置にあたる。他に性格不明の土坑が多数あるが、すべて弥生時代後期のものである。

出土した遺物の大半は後期弥生土器で、木製整理箱35箱に達する。他に須恵器・土師器と弥生時代の石器剥片（サスカイト製）が合わせて1箱ある。

## F 第60-16次調査

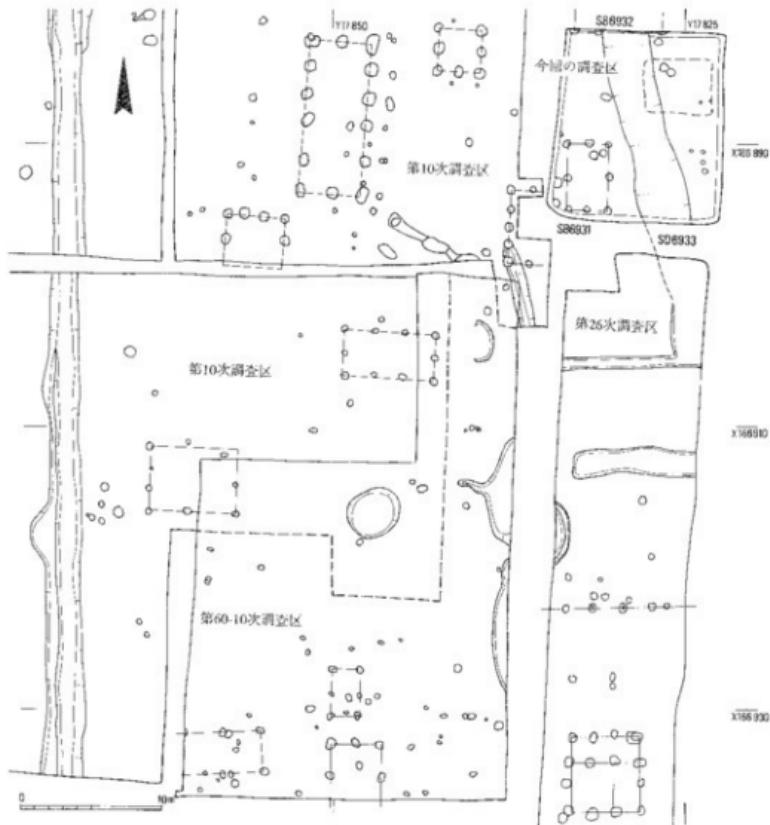
(1990年1月)

この調査は下排水路の改修工事に伴う一連の事前調査の一つとして、樋原市四分町で行ったものである。調査区は東西23m、南北3m弱である。弥生時代の包含層である黒褐色砂質土上面で精査したが、何らの遺構も存在しなかった。

## G 第60-20次調査

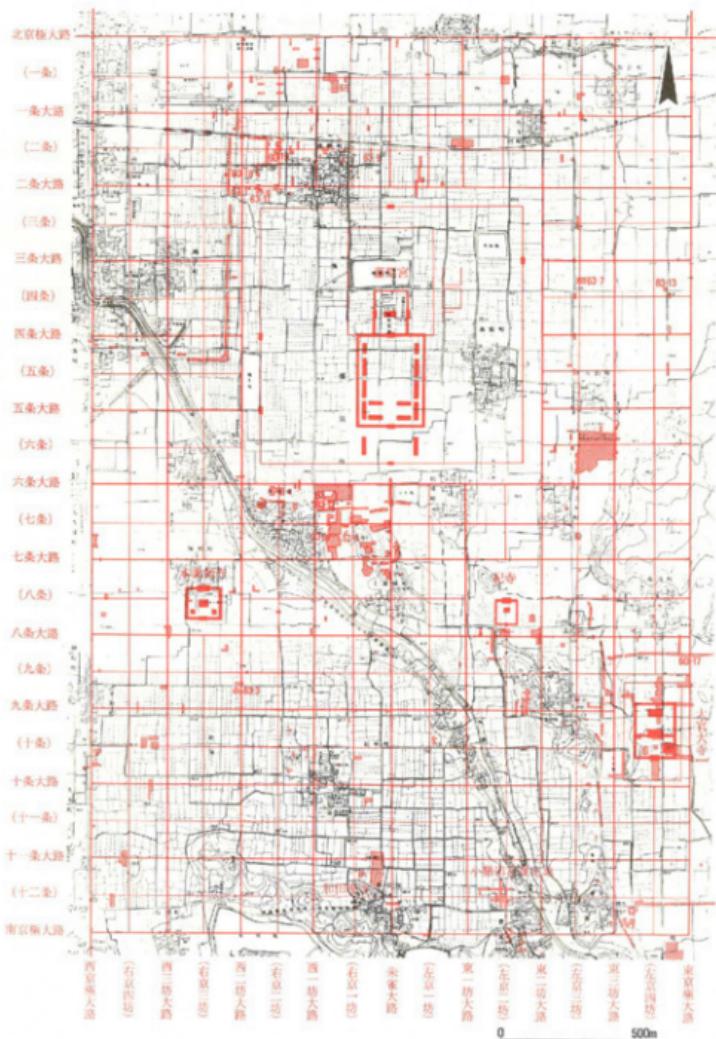
(1990年3月～4月)

この調査は下排水路の改修工事に伴う事前調査として、樋原市高殿町で行ったものである。調査地は藤原宮の南辺部で南面西門に一部かかる位置である。調査は南北約70mにわたり、幅4.2～4.5mの範囲で実施したが、既存の水路内であったため充分な調査が行えず、遺構検出は不可能。東壁面で内濠を確認したにとどまった。なお、この位置では門の遺構は削平されていると思われる。



第60-15次調査および周辺遺構配図

## II 藤原京の調査



藤原京内調査位置図

## 1 左京四条三坊の調査（第63—7次）

(1990年7月～9月)

この調査は、駐車場建設とともに事前調査として、横原市下八釣町で行ったものである。調査地は藤原京左京四条三坊東北・西北坪にまたがっている。三坊坊間路とその東西の宅地利用状況を明らかにすることを主たる目的に、南北20m・東西25mの調査区を設定した。基本層序は耕土・床土・暗褐色土・灰褐色粘質土の順で、暗褐色土・灰褐色粘質土の各上面で、中世の東西および南北方向の小溝多数、またその下の黄褐色粘質土上面で藤原宮期の遺構と弥生時代後期末頃と思われる遺構を検出した。

藤原宮期以前の遺構 SD6969は長辺が約13m、短辺が約11.5m、深さ約30cm、断面がU字形を呈する溝で、茶褐色粘質土が堆積していた。円形周溝墓の周溝である可能性が強い。埋土中には弥生後期（第V様式末頃）の土器が少なからず含まれており、東部で1ヶ所、特に量の多い範囲があった。同時期の土器は東南方向にある土坑SK6942・SK6943にもまとまって堆積していた。SD6960は、SD6969と埋土がよく似た溝状遺構である。今回の調査ではその東の一部分が見つかったにすぎない。溝内に遺物はなかった。その東南には土坑SX6970・SX6971があり、SX6971の埋土からは弥生時代の壺形土器が出土した。

藤原宮期の遺構 藤原宮期の遺構は重複関係によってA期、B期に分けることができる。

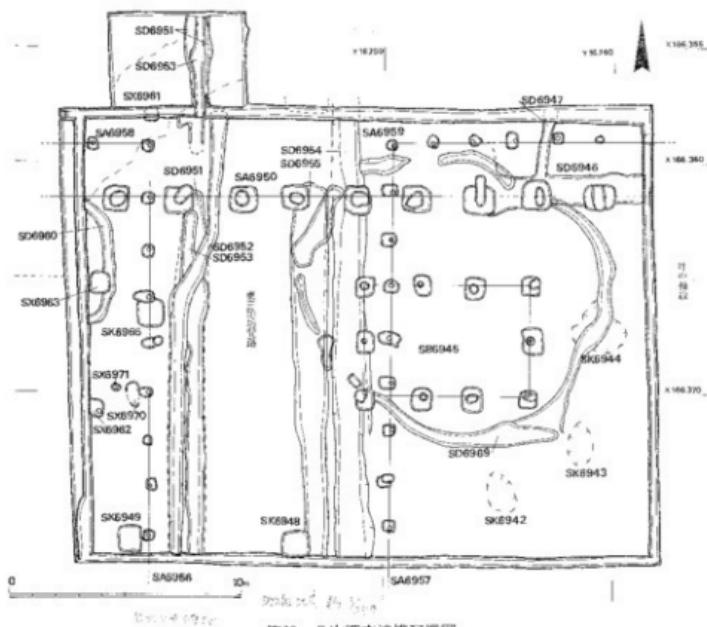
A期 東三坊坊間路およびその東西両側溝と、掘立柱塀SA6956・SA6957・SA6958・SA6959がある。坊間路の側溝は何度か掘り直されており、西側溝が3本（SD6951・SD6952・SD6953）、東側溝が2本（SD6954・SD6955）ある。西側溝は切り合い関係からSD6953→SD6952→SD6951の順である。いずれも埋土中に藤原宮期の土器片が含まれている。層位や埋土の遺物からこれらの側溝と塀の並存関係を確かめることはできなかった。西端のSD6952は、SA6958の南6m付近から東に蛇行し、SA6958の東北で途切れている。SD6951・SD6953は、SA6958の東南で途切れるが、北側へとまた続いている。東側溝SD6954もSA6959の西南で

一度途切れ、北にまた続くようである。しかしSD6954は調査区内では一貫して北まで続いており、他の側溝と様子が異なっていた。SA6959とSD6951、SA6957とSD6954の心心距離がそれぞれ等しく、これらの塀と溝が組み合うようである。東三坊坊間路の路面幅は約5.6～5.8m、側溝間の心心距離は約7.0～7.1m、溝の心から塀までの距離はそれぞれ1.8～2.0mになる。SA6956は西北坪の東を限る南北塀で、東西塀SA6958が鍵の手にとりつく。またSA6957は東北坪の西を限る南北塀でやはり北端で東西塀SA6959が鍵の手にとりつく。SA6958・SA6959は同一線上に乗る。坪内をさらに南北に分ける施設であろう。各塀の柱間はSA6956が約2.1mで8間以上、SA6959が約2.0mで6間以上あり、ほとんどの柱穴には柱痕跡が残っていた。

B期 A期の坊間路および区画塀を廃して、少なくとも四条三坊西北・東北坪の両方をひとつにした宅地割へと変化した。SA6950は柱間約2.6mの掘立柱塀でA期の東三坊坊間路を遮断する形で東西に9間以上続いている。柱穴はすべて抜取り痕跡をともなう。しかし抜き取った方向は一定でない。SD6946はSA6950に切られる浅い帯状の東西溝である。溝の西側は削平によってはっきりとその範囲を知ることができなかった。SD6947はSD6956の北側にとりつく南北溝である。いずれも深さは10～12cm程度しか残っていない。SB6945は3×2間の東西棟で、柱間は桁行・梁行とも約2.4m等間である。西妻の柱穴は坊間路東側溝の埋土を切っており、北側の東西塀SA6950とは約3.8m隔たっている。SK6948は坊間路東側溝の埋土を切る方形の土坑である。深さ約1.1m、上層からは藤原宮期の須恵器片が出土している。SK6949は調査区の西南隅にある。SK6948とはほぼ形が同じで、藤原宮期の須恵器片が少量出土した。深さは1.2m以上ある。

#### まとめ

今回の調査によって、京内 の今まで調査が行われていなかった地域に展開する遺構の一部が明らかになった。藤原京関連の遺構では、東三坊坊間路とその東西の土地利用、これらを廃して新しい土地区画での大規模な営みがあったことの一端を知りえた。特にA期の1坪を田の字形に四等分する従来の土地



第63-7次調査遺構配図

利用から、B期の東西2坪にまたがる宅地利用へと変化していくことは新知見である。しかも、東西両坪にわたるSA6950は坪の南北2等分線近くに位置しており、1坊を横長に4等分する宅地の存在が想定できる。今後の隣接地における調査が期待される。また藤原宮期以前では、弥生時代の末頃の遺構がこの地域まで拡がっていることが確認できた。

## 2 左京九条四坊の調査（第60-17次）

（1990年1月～3月）

この調査は樞原市戸外町から明日香村小山の村道耳成線に至る東西農道新設に伴う事前調査の最終第3年次調査である。今回は事業地の東半部約200m分と、南浦池西側からの南北支線道路約80mが対象となった。調査地は藤原京左京九条四坊東北坪で、八条大路・東四坊大路想定位置にもあたることから、藤原京の宅地遺構・道路遺構、藤原京以前の遺構状況などの把握を目的とした。

調査は東西本線部分に幅6～3mの東西調査区、南北支線道路部分に幅3～2.5mの南北調査区、また本線の東端50m部分については一段低い2枚の水田に小面積の調査区を設定した。以下各調査区の検出遺構の概要を記す。

### 東西調査区

基本的な層序は、耕土・床土・灰褐色粘質土・青灰色砂質土・黄褐色粘質土・暗灰粘質土（地山）で、遺構はこれまでの調査で明らかになっている7世紀の大規模な整地土である青灰色粘質土・黄褐色粘質土上面で検出した。整地土は調査区西端で約45cmの厚さがあるが、東にいくに従いうすくなり、約56m付近



第60-17次調査位置図 (1 : 3000)

でなくなる。また、西端から約74m付近からは東に向かい地山面が傾斜し、古代～中世の遺物を含む厚い粘土質が堆積している。幅狭い調査区のため、粘土層の掘り下げは部分的に行ったが、東端では地表下2m以上続く。

東西調査区で検出した主な遺構は壘立柱建物2棟、井戸2基で、他に多数の東西・南北小溝、土坑などがある。建物SB2470は桁行4間以上の南北棟で、柱

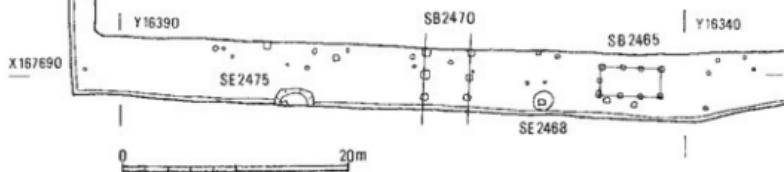
間寸法は約2m、柱掘形は一辺50～70cmである。方位が北で東に若干振れる。建物SB2465は桁行3間・梁行2間の東西棟で、柱間寸法は桁行1.8m・梁行1.2m、柱掘形は一辺

40～50cmである。SB2470同様、東にやや振れる。井戸SE2468は径約1.7mの円形掘形の中央やや西南部分に内法寸法一辺

SD2487 約55cmの方形縦板組の井戸枠が残る。四隅に角柱を立て、下端から40cmほどに横桟をはめこみ、各辺に2～4枚の縦板を  
SD2485 たてる。底から検出面まで約1.3m。井戸枠内から藤原宮期の上器類・斎串など出土。井戸SE2475は、径約3.5mの円形掘形の中央西端に東西39cm、南北54cm、高さ46cmの箱形の井戸枠1段が残る。井戸枠の位置、大きさと掘形の大きさなどを

SE2483 からみて、作りかえたとみられる。掘形検出面から井戸底まで約1.4mである。井戸枠内から藤原宮期の上器類・斎串出土。また、井戸枠抜取りから建物の雛形部材の斗1点が出土。

SD2482 ふくみ部分のたちあがりは欠損するが、一辺約5cm、現存高約3.3cmの巻斗で、雛形部材の藤原京内からの出土例は、右京  
SD2481 七条一坊(第23次)の井戸SE2270につき2例目である(概報9)。



第60-17次調査遺構配図(1:500)

本線道路部分の東端50mは、約2mほどの段差で低くなっている。2枚の田に東西4m・南北2.5m（西側）、東西3m・南北2.5m（東側）の調査区を設けた。いずれも粘質土と砂質土の互層となった低地の堆積状況を示し、東側の調査区では砂層中からかなり多くの藤原宮期を中心とする土器類が出土した。

#### 南北調査区

層序は東西調査区と同様であるが、整地上下は北半では赤褐色砂質土となる。整地土は北端で約10cmの厚さである。主な検出遺構は掘立柱建物1棟、井戸1基、東西溝4条で、他に斜行溝、東西・南北小溝、土坑などがある。建物SB2480は西側柱2間で、東西柱列は2間以上である。南北柱間寸法は1.6m、東西柱間は1.2m。西側柱は径40～50cmの円形掘形で、礎板とみられる板材と礫が入る。東西溝4条はいずれもやや東で南に振れる。SD2482・2485からは藤原宮期、SD2481・2487からは7世紀後半の上器が出土した。井戸SE2483は径約2.7mの円形掘形で、井戸枠はすべて抜き取られていた。埋土から藤原宮期の土器類が出土した。

#### まとめ

今回の調査では藤原京八条大路・東四坊大路は検出されなかった。東四坊大路想定上には藤原宮期と考えられる井戸SE2468があり、すぐそばの建物も同時期の可能性がある。そうなると京造営当初から東四坊大路は施工されなかったことも考えられる。ただ、今回は調査区の制約もあり、今後周辺での充分な調査が必要である。

藤原宮期の宅地利用状況については、明確な建物群は検出できなかったが、井戸3基があり、周辺に建物の存在が想定される。特にSE2475からは雛形斗が出土しており注目される。包含層からではあるが鷦尾片も出土しており、位置的にみてもこの一帯が大官大寺になんらかの関連をもつことがうかがえる。

大官大寺北西一帯にひろがる7世紀前半から中頃の整地土については、ほぼ東四坊大路想定部分まで確認され、今回の調査で東西幅は約390mに及ぶことになる。昨年度の調査では整地事業に伴う石組暗渠が検出されており、今後はこの整地に伴う遺構の解明が必要である。

### 3 右京七条一坊の調査（第63次等）

#### A 第63次調査

(1990年3月～5月)

この調査は宅地造成に伴う事前調査として櫛原市高殿町で実施したものである。調査は3年度にわたるもので、1989年に実施した第62次調査に引き続いた第2年次の調査である。調査地は第62次調査区の西北に接する位置で、藤原京の条坊呼称によれば、右京七条一坊西北坪にあたり、そのなかでも西北隅の一角にあたる。調査面積は約1200m<sup>2</sup>である。

右京七条一坊の地域ではこれまでにも多数の調査が行われており、坊の内部の状況が藤原京のなかでは最も明らかになっている地域である。東南の坪のはば全城は日高山の丘陵地であるが、西南の坪では第19・49次調査などで「コ」の字形配置をもつ一町を占地する大邸宅の中心部が明らかとなっている。東北の坪では朱雀大路・七条条間路・西一坊坊間路を検出したにとどまっている。第62次調査区は西北の坪にあたっていたが、小規模な建物群を検出している。

今回の調査も、第62次調査と同様に藤原宮に接する宅地の利用状況の実体を確認することを目的として行った。

遺構　　検出した遺構は弥生時代から中世にいたるものであるが、主たるものは藤原宮期前後のものである。

今回検出した藤原宮期前後の主な遺構は建物・溝・井戸・土坑などである。

建物は調査区の東側で3棟検出した。この3棟は東西溝SD6510と直接の切り合い関係はないが、すべてSD6510をまたぐように建てられている。

建物SB6914は西側柱筋を近代の溝で破壊されているが、2×2間の南北棟で、桁行2m・梁行1.5mの柱間である。柱掘形は0.5m前後である。

建物SB6913は3×2間の南北棟で、桁行1.5m・梁行2.3mの柱間である。柱掘形は0.6m前後である。SB6914と重複し、それより新しい。

建物SB6915は2間以上×2間の東西棟で、西半は削平されている。桁行2.5m・梁行2mの柱間である。柱掘形は0.4～0.8mと不揃いである。柱根を残す

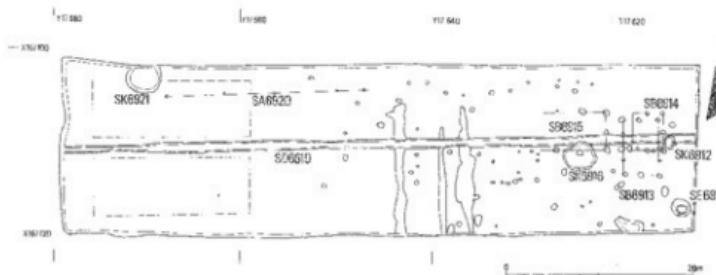
ものもある。SD6510を切る藤原宮期の土器を出土する土坑SK6916との切り合いで、SD6510より新しいことが確認できる。

東西塀SA6920を調査区の西北部で検出しているが、他の遺構と比して振れが大きいため、後出の可能性もある。削平のためか柱間は不揃いである。柱根を残すものの、柱根は0.1m程度、柱掘形は0.2m前後の小規模な溝である。SA6920は想定される六条大路の路面上、もしくは南側溝位置に存在する。

調査区のはば中央で検出した東西溝SD6510は幅約1m・深さ約0.3mの規模で調査区を横断し、第62次調査区から総延長120mを検出したことになる。この溝は六条大路南側溝の想定位置より約5m南に位置し、六条大路の南側溝とするには若干の疑問がある。また、SD6510の振れは西で南へ約1°という調査地周辺の条坊の振れと比較すると大きい数値を示す。埋土からは藤原宮期の土器が出土している。調査区の東南隅で検出した井戸SE6911は石組井戸で、径約2mの掘形を有し、径約0.8m・深さ約0.5mの規模であり、人頭大の石を4～5段積んで構築している。埋土から、藤原宮期の土器が出土している。

以上の遺構が藤原宮の時代および前後する時期の主な遺構であるが、第62次調査区に比して遺構密度が低いものである。

調査区の西方に弥生時代の包含層があり、その状況が北約200mの第59次調査で検出した弥生時代の水田跡と類似していたために、東西17m×南北14mの範囲で下層遺構の検出をはかったが、畠など水田であることを積極的に証明する遺構は残念ながら検出することができなかった。



第63次調査遺構配置図 (1 : 600)

**遺物** 瓦・土器類が出土しているが少量である。

瓦は軒丸瓦が1点出土している。土器は土師器・須恵器のほか、蹄脚硯1点・転用硯3点、製塙土器が出土している。土製品では土馬が出土した。

石器は弥生時代の石包丁、安山岩の刃器が出土している。

**まとめ** 今回の調査地は第62次調査区と比しても非常に遺構密度が低いものである。第62次調査区の場合でも北半では藤原宮期の遺構の密度は低いものであったことと軌を一にするものであろうか。

遺構の細かい時期区分・並存関係は遺構どうしの切り合い関係はあるものの、出土する土器が藤原宮期のものであるため、明確なことはいいがたい。検出した3棟の建物は第62次調査の概報の区分による北で西へ約30°振れるD群に含まれるものであろう。

建物規模は第62次調査区と同様に小規模なものであり、宮に直接接する地域の一つのあり方を示すものかも知れない。宮の東西では大規模な宅地の存在が知られているが、宮に接する北側では空閑地に近い状況であり、南辺と似た状況なのであろうか。今後の調査の進展を待ちたい。

調査地内に想定される六条大路の問題であるが、六条大路は左京六条三坊（第21-2次）・右京六条二坊（第29-7次）で検出されており、その南側溝どうしを結んだ想定ラインは第62・63次調査区で検出したSD6510の北、5~6mの位置にあたるのである。しかし、両調査区ともにその位置には東西溝を検出することができなかった。このことについての一つの解釈はSD6510は六条大路と無関係な溝であり、六条大路南側溝は削平されてしまったとするものである。もう一つの解釈としては、平城宮の南辺を通る二条大路と同様に宮の前面では他の場所とは異なり道路が南に広くなっている、SD6510が六条大路南側溝にあたるとすることである。この場合、西方で南側溝を検出した第29-7次調査区は宮の南にあたっており、平城宮と同様であったとすることはできない。苦しい解釈ではあるが、藤原宮の場合では、宮の南面東門から西門までの間が他の場所と異なって広くなっていたとすることができるようか。いずれの場合であつたとしても周辺での調査の進展を待つほかはない。

## B 第63-4次調査

(1990年5月)

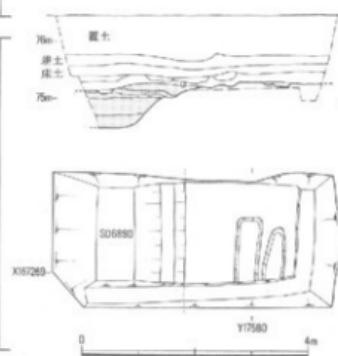
この調査は樞原市営墓地の整備に伴う事前調査として、樞原市上飛騨町で行ったものである。調査地は藤原京右京七条一坊西南坪の東北部にある。この坪では、第19(概報7)・49(概報17)次調査の結果、坪内全体を占める大規模な邸宅遺構の存在が明らかとなっているが、邸宅内東辺部の様相は不明な点が多くあった。昨年の第58-17次調査では、邸宅内を区画する東西塀SA1975が、南北塀SA1997より東まで及ぶ可能性があることが判明している。今調査地は第58-17次調査区のすぐ西南側に当たり、東西5m・南北2.5mの調査区を設定した。

調査区は現在駐車場であり、厚い盛土があり、現地表下0.7mが旧水田面である。基本層序は上から耕土・床土・青灰緑色砂質土・青灰褐色砂となる。

青灰褐色砂上面で、南北大溝SD6890と中世の南北小溝2条を検出した。SD6890は東半分のみを検出したため幅が不明であるが、検出分で2.1mあり、3m以上に復原できる。深さは80cmである。堆積土は大きく5層に分けられ、藤原宮期および若干遡る土器が出土した。SD6890の位置は邸宅内を内郭と外郭に区画する南北塀SA1997のすぐ東側であるが、当調査区の北方の第19次調査区には及んでおらず、内郭でも出ていない。掘削時期および行方については今後の調査の結果を待ちたい。



右京七条一坊西南坪遺構配図



第63-4次調査遺構配置図・断面図

## C 第63-6次調査

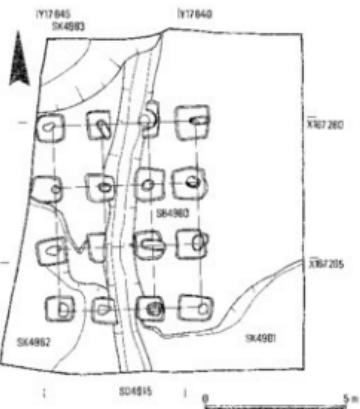
(1990年7月)

この調査は市営住宅建設に先立ち権原市飛驒町で行ったものである。調査地は藤原京右京七条一坊西南坪にあたり、第19次調査区の西南、第49次調査区の西北に接する。過去の調査では、門・脇殿を伴う正殿、後殿、後々殿等を整然と配した一町規模の宅地を検出している。今回の調査はSB4930の西側の施設を明らかにすることを目的とし、東西約9m・南北約12mの範囲を調査した。

調査区の土層は、客土・灰褐色砂質土・暗褐色砂質土ないし黄灰色砂・黒色粘土(地山)の順に堆積している。遺構は地表下約0.8mの暗褐色砂質土ないし黄灰色砂の上面で検出した。検出した遺構は、総柱の掘立柱建物1棟、土坑3基、南北溝1条、中世以降の東西及び南北方向の小溝多数である。

SB4980は南北3間・東西3間の南北棟総柱建物で、柱間寸法は南北約2.2m、東西約1.7mである。柱掘形は一边1mの方形で、現状の深さは0.4m程度である。西側柱北第2柱穴には径約30cmの柱根が、人頭大の礎盤の石上に残る。他のはとんどの柱穴にも同様な石が確認できた。柱の抜取り穴は小さく、ほぼ掘形内で納まる。一部に瓦を埋めたものがある。このSB4980は南妻柱筋をSB4930の南庇とほぼそろえ西側柱筋をSB4920の西側柱筋とほぼそろえている。SD4915は幅約1m、深さ約0.7mの南北溝である。

第49次調査区で検出した溝の続きで、総長約12m分を検出した。埋土から10世紀から11世紀前半の土師器・黒色土器が出土した。今回検出したSB4980は、後殿SB4930の西約12.5m、西脇殿SB4920の北約8mの位置にあり、SB4930とSB4920に柱筋をそろえている点から、後殿の脇殿風に倉庫がたてられたものと考えることができる。



第63-6次調査遺構配置図 (1:200)

#### 4 右京九条三坊の調査（第63－3次）

（1990年4～5月）

この調査は、雇用促進事業団奈良技能開発センターの体育館建設の事前調査として、橿原市城殿町で行ったものである。建設予定地は藤原京右京九条三坊の東南坪にあたり、二坊大路の西側溝とその西側の宅地の存在が予想される位置にある。調査は東西33m・南北19mの範囲にし字形の調査区を設け、一部北へ拡張した。調査面積は547m<sup>2</sup>である。

調査区の層序は、上からグラウンド造成に伴う盛土・旧水田耕土・床土・灰褐色土・灰褐色砂質土（地山）の順で、遺構の大部分は灰褐色砂質土の上面で検出した。しかし、重機の実背に伴うと思われる攪乱が著しく、遺構面はかなり破壊を受けている。

遺構 検出した遺構には、二坊大路の西側溝と推定される南北溝、藤原宮期の井戸・土坑・小柱穴群、弥生時代から古墳時代にかけての斜行溝と土坑などがある。このほか、調査区全体から中世以降の水田耕作に關わるとみられる東西・南北方向にのびる多数の小溝を検出したが、これについては図示・記述とともに省略する。

二坊大路の西側溝と推定される南北溝SD2641を、ほぼ想定位置で検出した。SD2641は溝の東肩が南北方向の小溝で破壊されているため、溝幅は約0.6mしか残らず、南は削平が著しく約7m分を検出したにとどまる。

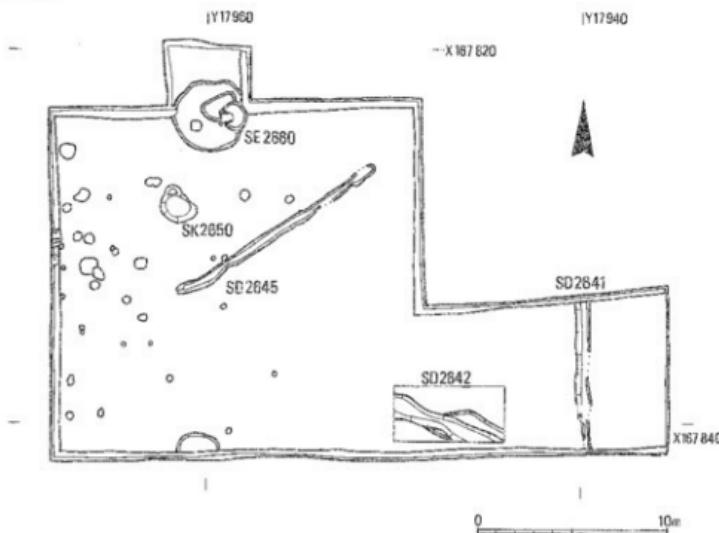
SE2660は、西側溝SD2641の西約20mの位置にある一辺約0.6mの方形縦板組の井戸である。径約3.5m、深さ約1.5mの円形掘形の東側に寄せて井戸枠を据えるが、東半は井戸埋没後に据られた土坑SK2659によって壊されている。四隅に柱を立て、3段の横桟をほぞ留めし、内側に3枚の板を立て、その目地をふさぐように外側に2～3枚の縦板を立て、さらに補助材で外側から補強している。西側から構築されたようで、西側下段の横桟のほぞ穴は貫通していた。井戸枠内から出土した遺物には、須恵器の壺・壺・横瓶、土師器の壺などがある。また、井戸埋没後に堆積した埋土最上層からは、藤原宮期の土師器・須

恵器とともに、炭化物と銅製品の断片が出土した。

藤原宮期の遺構は、これ以外に多数の土坑と小柱穴があるが、いずれもまとまりを欠く。藤原宮期の建物は調査区のさらに西側に存在したものと推定される。

弥生時代から古墳時代にかけての遺構も顕著なものがないが、藤原宮期の遺構検出面である灰褐色砂質土の中にはかなりの弥生土器が含まれており、近くに弥生時代の集落が存在した可能性が高い。斜行溝SD2645は幅約0.5m、深さ約0.2mの素掘りの溝で約12m分を検出した。埋土から後期末の弥生土器が出土した。土坑SK2650は、長径約2m、深さ約0.5mで、壊り鉢状を呈する。埋土から後期末の弥生土器が出土した。斜行溝SD2642は、東南から西北へ流れる自然流路で、砂を主体とする堆積土から後期末の弥生土器がまとまって出土した。

遺物 出土遺物の大半は藤原宮期と弥生時代後期の土器であるが、これ以外に縄文土器、瓦器、白磁、上馬、フイゴの刃口、埴輪片、瓦片などがごく少量出土した。



第63-3次調査遺構配置図 (1:300)

## 5 本薬師寺の調査（1990－1次）

（1990年8月）

この調査は、権原市城殿町に所在する史跡本薬師寺跡において、金堂跡基壇上に建つ庫裏の増改築に伴う事前調査として実施した。調査箇所は現庫裏北側、基壇の北辺中央付近である。調査面積は2.7m<sup>2</sup>。遺構は遺存状態が良く、基壇周囲の雨落溝と石敷を検出した。

**遺跡の現状** 本薬師寺跡には、現在金堂跡の他に東塔と西塔の基壇及び礎石が遺存する。金堂跡は、東西約36m・南北約29m、高さ1～1.5mのやや不整な長方形土壇として残り、縁辺には低い土塁が巡るが、これは後世の工作である。基壇上には一部庫裏に隠れてはいるが、現状で19個の礎石を確認できる。うち、18個は元の位置を保つ。ただし、礎石は地面から浮き上がり、一部は根石が現れるほどなので、基壇面はかなり削平されている。礎石は身舎と庇のものであり、身舎の礎石すべてに地覆座が作り出されるから、ここに壁や扉が設けられたのであろう。柱間寸法は平城薬師寺金堂と一致する。天平尺で桁行77.5尺（中央の3間=13.5尺、脇の間=10尺）、梁間40尺（10尺等間）である。裳階の礎石は全く残っていない。また、現庫裏の基礎に凝灰岩が転用されているが、これは基壇外装材や敷石材であろう。なお、東塔には心礎のほか15個の礎石が残るが、西塔には心礎しか残っていない。

### 過去の調査

本薬師寺に関連する発掘調査は過去に3回実施された。1976年の第1次調査では寺域西南隅を調査し、藤原京の八条大路と西三坊大路の交点、寺域の西を限る区画施設に関連するとみられる南北溝を検出した（概報6）。1983年の第2次調査は、金堂跡の東北東、寺域の東辺ほぼ中央で行われ、7世紀の自然流路を検出、これが本薬師寺造営の7世紀末には埋立て整地されたことを確認した（概報14）。第3次調査は1989年に実施されたもので、金堂跡の西方、回廊の内側で調査した。しかし、境内面が深く削平されていることを確認するにとどまった（概報20）。

## 遺構

今回の調査は、現在の庫裏の北側、金堂跡土壇の北辺ほぼ中央に、南北1.9m・東西1.4m、面積2.7m<sup>2</sup>の調査区を設けて実施した。調査区の層序は、上から表土・暗黄褐色土・灰色混じり茶褐色土で、各層とも北に傾斜して堆積する。暗黄褐色土の下部以下には大量の瓦が含まれていた。灰色混じり茶褐色土の下、地表下約1.5mで、玉石敷と東西方向の玉石組雨落溝を検出した。玉石組の雨落溝は人頭大の石を両側に立て並べ、底にも同様の石を敷く。内法で幅50cm、側石頂部から底石の上面までの深さは約10cm、石敷と溝の底石の比高差は約5cmである。溝の中には瓦を含む砂屑が薄く堆積していた。石敷はこの溝の北と南に広がるものであり、やはり人頭大の石を敷き並べ、隙間に小さな石をはめ込む。溝の北で石の抜けている所があるものの、調査区内での遺存状態はよい。溝は調査区の東西に延びる。石敷も調査区の外へさらに広がるが、南は溝の南端から1石分、約30cmの石敷を確認したのみで、その南は石がなかった。これが石敷を抜いたためなのか、階段の石を抜いたためなのかは明かでない。なお、金堂礎石の上面と石敷面との比高差は1.6mある。石敷と石組溝の下層は調査しなかった。

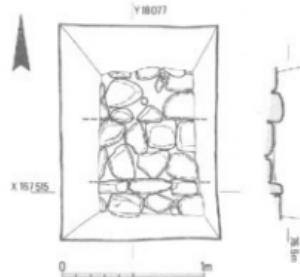
## 遺物

出土遺物は、瓦と土器、および少量の凝灰岩片である。瓦は多量の丸・平瓦のほかに、軒瓦13点、熨斗瓦3点、鬼瓦1点がある。軒瓦は、軒丸瓦5点と軒平瓦8点。これを型式別にみると、軒丸瓦は創建の6276型式E種2点、奈良時代中頃の平城宮6225型式B種2点、奈良時代末頃の復古瓦（薬師寺33型式）1点である。軒平瓦は、重弧紋2点（うち三重弧紋1点）、6641型式2点（II種1点、K種1点）、6647型式I種3点のほか、奈良時代後半（平城薬師寺C期（天平宝字2（758）～延暦3（784）年）の6763型式B種1点がある。6647 IはC種に似るが内区厚が狭い小型の軒平瓦。2次調査でも1点出土している。6276Eと組み合って、金堂裏階に葺かれたのだろう。以上の軒瓦のうち、軒丸瓦6225Bと軒平瓦6647 I以外すべて、平城薬師寺からの出土が確認されている。

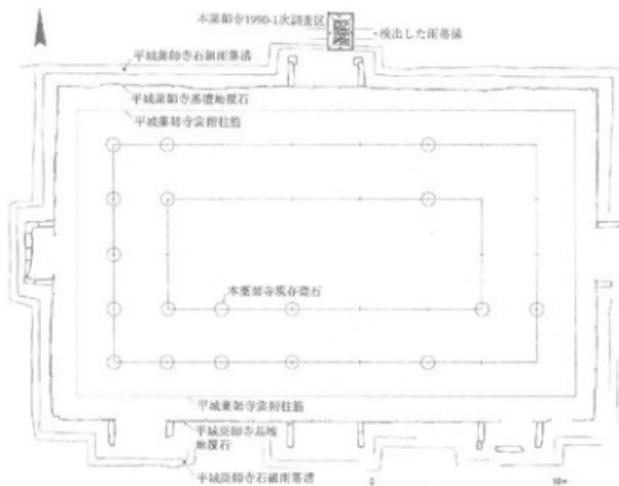
土器は土師器・須恵器・瓦器があり、近世の土師器皿が多い。

## まとめ

今回の調査区は小規模なものではあったが、本薬師寺金堂についていくつかの重要な手がかりを得た。まず、今回の調査位置であるが、本薬師寺金堂跡に残る礎石の配置は平城薬師寺のそれと一致するので、現地に残る礎石位置を測量し、それと平城薬師寺の金堂発掘遺構図とによって二つの金堂を比較すると、今回の調査区は金堂北辺の中央やや東より、金堂背面の階段外にあたる。従って、検出した雨落溝は階段の北を巡る雨落溝、石敷は基壇周囲の石敷に対応する。雨落溝を石組とし、玉石敷を伴うことは平城薬師寺と同じである。しかし、平城薬師寺の同じ位置の雨落溝に比較すると、今回検出した溝は北肩で約1m北、つまり外側にある。さらに、平城薬師寺では、雨落溝が基壇周囲では幅約50cmあるのに対し階段位置では幅約30cmと狭くなるが、今回検出したものは約50cmと広い。



本薬師寺1990-1次調査遺構平面図・断面図



本薬師寺1990-1次調査位置図

このように、今回の調査によって、本薬師寺金堂は平城薬師寺と同じく基壇周囲に石敷と石組の雨落溝が巡っていることが明らかとなった。しかしながら、その雨落溝の位置は平城薬師寺のそれよりさらに外側に位置して今後に検討課題を残すこととなった。本薬師寺金堂跡には裳階の礎石が全く残っていないが、出土軒瓦に裳階の軒瓦と推定される小型のものが含まれるので裳階があったことは間違いない。今回の調査位置が背面の階段位置であったことを勘案して二つの薬師寺金堂の雨落溝の位置の違いを解釈すると、

- ①基壇や階段の規模は平城薬師寺と同じ。階段の雨落溝の位置だけが違う、
- ②基壇平面規模は同じだが階段の規模が大きいため雨落溝が外側に位置する、
- ③基壇も階段も規模は同じだが雨落溝が全体に一回り外に位置する、
- ④基壇規模が平城薬師寺より大きい、

などの可能性が考えられる。③の場合には裳階の軒の出を大きく想定する必要があり、裳階の礎石位置が同じでは構造的に無理が生じ、④のように基壇規模を大きくみて、裳階の礎石も一回り外側に配置されていたと考えた方がより可能性がある。これらの可能性を検証するためには今回の調査はあまりに小面積である。

出土遺物についての新たな知見は、これまで知られていなかった裳階の軒瓦の組み合わせ(6276E-6647I)が考えられたこと、奈良時代の軒瓦が出土したことである。後者は奈良時代にも修理などが行われたことを推測させるが、奈良時代の軒瓦が平城薬師寺と同范かあるいは平城宮と同范の軒瓦であったことは、本薬師寺が依然官寺として維持管理されたことを推定させる。

先にも述べたように本薬師寺金堂跡は遺構の遺存状態がかなり良好であり、今後の調査・整備が期待される。

## 6 その他の調査

### A 右京二条二坊の調査（第60-19次）

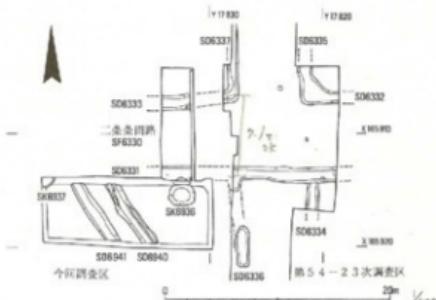
(1990年3月～4月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、樋原市醍醐町で行ったものである。調査地は、藤原京右京二条二坊西南坪から二条条間路にまたがっている。周辺は前年度までの調査で、西二坊坊間路と二条条間路の交差点、右京二条二坊西北坪内にいとなまれた施設等が明らかになっている。

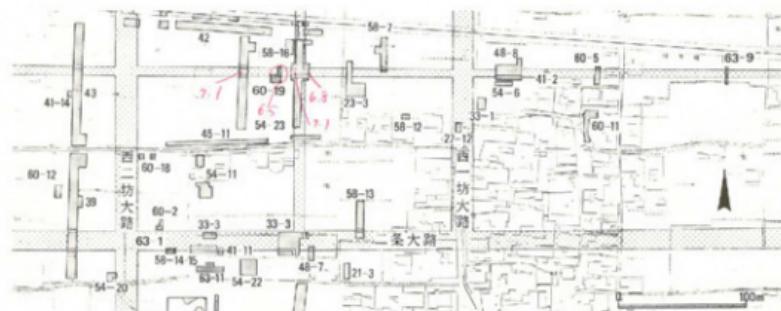
調査は、坪内に予想される施設と条間路の一端を知るため、 $15 \times 5$ mの東西トレントと、北につながる $3 \times 10$ mの南北トレントを設定して行った。

調査区の基本層序は耕土・床土・暗褐色粘質土・黄褐色粘質土・暗茶褐色粘質土で、暗褐色粘質土・黄褐色粘質土の各上面には多数の南北・東西小溝と、黒色土器片を含むSK6936がある。その下層の暗茶褐色粘質土で二条条間路南北側溝SD6331・SD6333と斜行溝SD6940・SD6941を検出した。二条条間路の南北側溝は、ともに幅約1.2m、条間路の路面幅は約5.1mである。斜行溝は双方とも幅約0.6mで東南から西北に向かってトレントのほぼ中央に並んでいた。二つの斜行溝は灰白色粗砂によって一気に埋もれた状況で、出土遺物もなく、その性格はわからなかった。藤原宮期以前の可能性が強い。

遺物は、床土下より中世の瓦器



第60-19次調査追構配置図



右京二条・二坊周辺調査位置図

片に混じって、藤原宮期の土師器片・須恵器片、少量の瓦と軒平瓦・軒丸瓦の小片が1点ずつあった。条間路の両側溝内からも少量の土師器片・須恵器片が見つかっている。

### B 右京二条二坊の調査（第60-18次）

(1990年2月)

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、橿原市綿手町で行ったものである。南北2m幅で敷地いっぱいにトレンチを設定し重機で掘削したが、盛土が厚く、床土下の暗灰褐色粘土層を2.5mの深さまで掘ったが遺構・遺物は確認できなかった。

### C 右京二条二坊の調査（第63-1次）

(1990年4月)

調査地は藤原京右京二条二坊西南坪南方で、二条大路の想定位置にあたる。また宮西外濠の延長線上である。二条大路南側溝の想定線と西外濠延長線にかかる形で、東西10m・南北6mの調査区を設定した。検出した遺構は、中世の小溝多数と縄文土器を含む南北流路1条のみで、藤原宮期の遺構は確認できなかった。

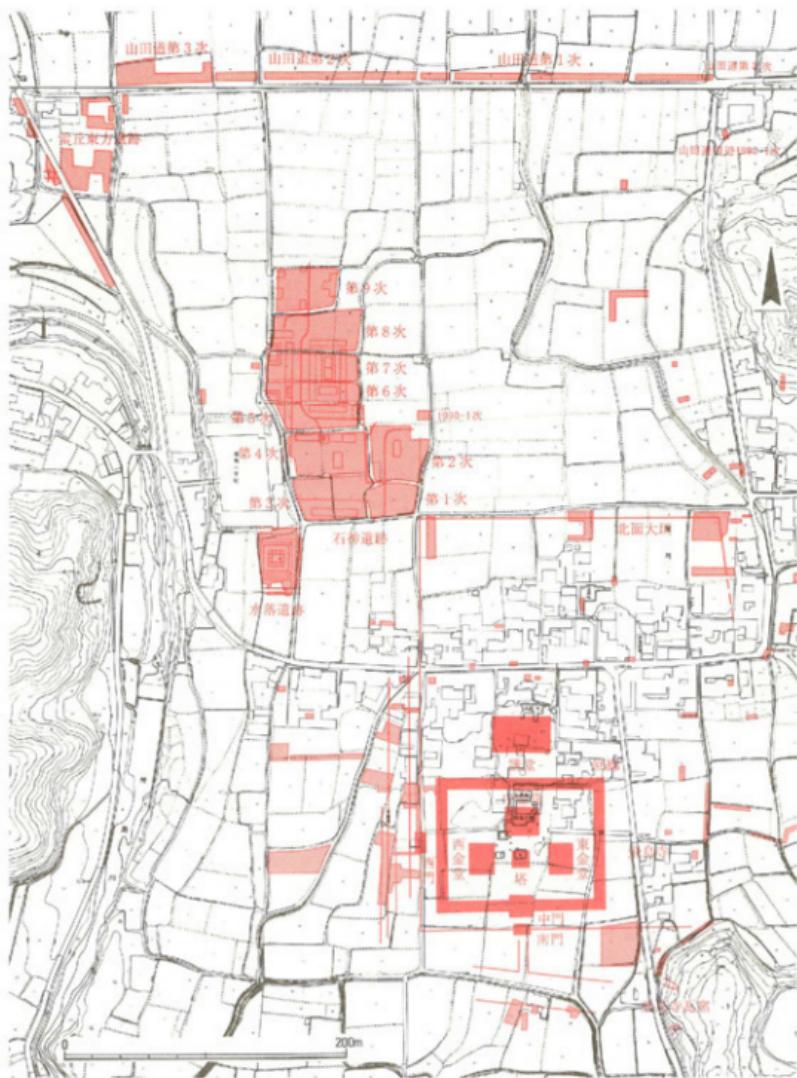
### D 右京二条一坊の調査（第63-9次）

(1990年11月)

この調査は、住宅新築の事前調査として橿原市醍醐町で行った。東西5m・南北15mの調査区を設けたが、盛土が厚く遺構面では3×13mほどを調査した。

調査によって、二条条間路南側溝SD6412を検出した。幅0.7m、深さ0.2mである。北側溝SD6411は削平されて遺存していなかったが、その北で東西に並ぶ2個の柱穴を検出した。SD6411の想定位置から北へ約1mを隔てる。西北坪の南限を画す掘立柱東西塀の柱穴かもしれない。柱間は2.7~3mと推定される。

### III 飛鳥地域の調査



石神遺跡周辺調査位置図（1：4000）

## 1 山田道第2・3次調査

(1990年1月～4月・1990年10月～11月)

### はじめに

この調査は、県道「権原神宮東口停車場飛鳥線」の拡幅工事に伴う事前調査として、高市郡明日香村奥山において昭和63年度から行っているもので、同年度の第1次調査については『概報20』すでに報告したところである。

調査地は雷丘から東方桜井方面へ向かう現県道の北側の水田で、ほぼ中央を大官大寺から水落遺跡にいたる里道と吉野川分水が通り、また西端を百貫川が北流する。現県道は「山田道」を踏襲していると考えられており、また第2次調査区内東部に藤原京東京極大路およびその前身の中ツ道が想定できる。この一連の調査では、「山田道」に関連する遺構の検出と当地域の古代における土地利用状況の把握を主たる目的としたのだが、第1次調査では「山田道」に直接関連する遺構は見つからず、替わりに6世紀末から8世紀にわたる遺構が少なからず存在した。特に7世紀代の掘立柱建物のいくつかは「山田道」推定位にまで及んでおり、「山田道」の位置ならびに時期について問題を提起することとなったのである。第2次・第3次調査は前回の成果を踏まえ、7世紀代を中心とする遺構群の広がりと「山田道」および「中ツ道」関連遺構の解明を目的として、それぞれ平成元年度および2年度に実施した。

第2次調査は第1次調査区の西で長さ145mを対象としたが、里道・分水をはさんで東区(106m)と西区(31.5m)に分けて行った。第3次調査はさらに西の延長66.5mと第1次調査区の東で9.4mの2ヶ所で行った。いずれも幅7～8.5m、一部拡張したところがあるので、発掘面積は第2次が973m<sup>2</sup>、第3次が820m<sup>2</sup>となった。以下では、二次分の調査結果をまとめて報告することにしたい。

### 遺構

調査対象地が総延長200mを超え、しかも東から西へ下がる緩斜面にあたるため、東と西では層序がかなり異なる。第2次東区東部では耕土・床上の下に暗茶褐色砂質土があり、中央部東半では床土の下が黄褐色粘質土、中央部西半

では暗褐色粘土・黄褐色粘土、西部では灰色粘土・暗灰色茶砂質土・暗灰色粘土・青灰色砂混じり暗灰色粘土・黒褐色粘土がある。西区は、耕土・床土・暗灰褐色粘質土・青灰色砂質土・青灰色砂混じり暗灰色粘土・黒褐色粘土の順である。遺構検出は東区東半では床土直下の暗茶褐色砂質土や黄褐色粘質土の上面で行い、東区中央部西半では黄褐色粘土の上面、西部では青灰色砂質土や青灰色砂混じり暗灰色粘土の上面で行ったが、東端では暗茶褐色砂質土の下層、西部では黒褐色粘土の下層でも遺構を検出した。

第3次調査区東部では床土直下が青灰色砂質土の整地層である。中央部では間に暗灰色砂混粘質土が入るが、遺構検出面は東部と同じである。西部では床土の下に黄褐色粘質土が介在し、その下の黄灰褐色粘質土の地山面で遺構を検出した。南半部ではその上を礫敷SX2633が覆っている。

検出した遺構には掘立柱建物14棟以上・同塀6条以上、竪穴住居跡4棟、河川跡1、素掘り溝、杭列、上坑などと、塊石を詰めた暗渠3条を伴う大規模な整地層がある。これらの遺構は弥生時代・古墳時代・7~8世紀代および中世にわたる。

**弥生時代の遺構** 第2次東区東端の7世紀代の整地土下層で検出したSD2510がある。南で東に弯曲する弧状の南北溝で、幅2m、深さ1.2m、断面形はV字形。東南延長部が第1次調査IV区西南隅で確認されている。弥生時代中期末の土器が出土した。集落の西を画す環濠の可能性が強い。溝から西では弥生時代の遺構・遺物が希薄であった。

**古墳時代の遺構** 第2次東区中央の河川跡SD2570をはさんでその両岸で、竪穴住居跡SB2544・2556・2558・2560と掘立柱建物SB2541・2575などを検出した。SD2570は北々西に流れる小河川の跡。幅2.6~4.5m、深さ1mある。堆積層から多量の布留式土器のほか、少量の朝鮮半島系土器、木製鞘などが出土した。

SB2544は一辺推定約4.5mの、SB2556は一辺4.3m・深さ15cm、SB2560は一辺5.7m・深さ5cmのいずれも方形竪穴住居跡。SB2556は東辺に一段高い部分があり、またSB2560は南辺ほぼ中央にピットを伴う。SB2558は規模不明だがSB2560と重複しこれより古い。掘立柱建物SB2541は柱間1.85~1.9mの2間×2間

以上、SB2575は梁行1.3m・桁行2.0m。竪穴住居跡と同じく、SD2570に平行する方位をとる。5世紀後半のもの。

第3次調査区の西部で検出した南北溝SD2634もほぼ同時期で、振れも同じである。

7世紀代の遺構　掘立柱建物・塀は第2次東区の東端と中央東部に分布する。ほぼ方眼方位にのるものと北でやや大きく東に振れるものがある。

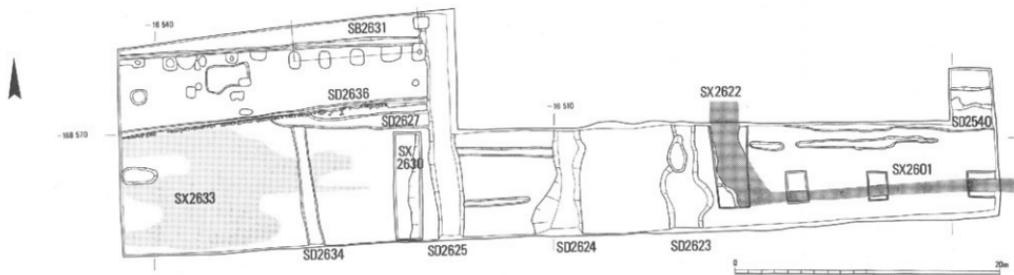
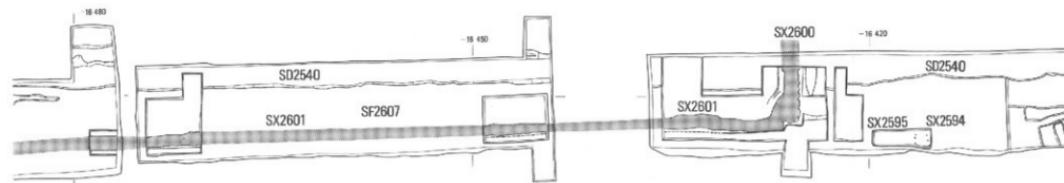
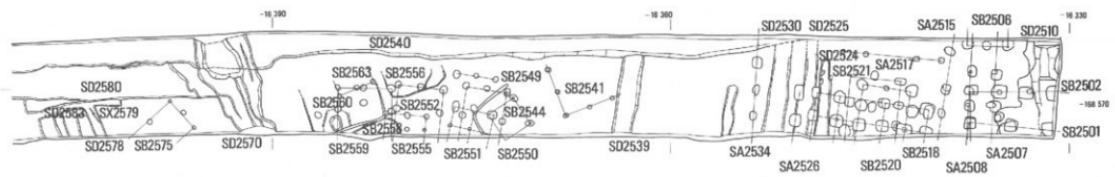
北でわずかに東に振れる建物・塀は、SB2501・2502・2506、SA2507・2508である。

SB2501は、柱間3.0m(10尺)等間。南北棟の北妻か。柱掘形に山土が少量混じる。SB2502は、東西棟か南北棟か不明。東西方向の柱掘形長辺1.1~1.2m、柱間2.25m(7.5尺)等間。柱抜き取り穴に黄色の山土が詰まる。整地上との関係でSB2501より古い。SB2506は、南北棟の南妻を検出。柱間1.5m(5尺)等間。東の柱穴に柱根が残る。SA2507と2508は、1.8m(6尺)を隔てて平行する塀。あるいは両者が一体で建物となるかもしれない。柱間2.5m等間。柱抜き取り穴に黄色の山土が詰まる。

北でやや大きく東に振れる建物・塀には、SB2518・2520・2521・2549・2550・2551・2552・2555・2559、SA2515・2517・2526・2534がある。

SB2518は、建物の方向は不明だが、東西方向の東2間は柱間3.3m(11尺)等間、西端と南北方向の柱間1.8m(6尺)。総柱で西に庇が取り付くか。SB2520・2521もこれらと重複する南北棟建物である。柱間1.8m(6尺)。3棟の建物は柱穴の重複関係から、SB2518→SB2521→SB2520の順である。SB2549~2552・2555・2559はSD2539の西、古墳時代の竪穴住居跡と重複して検出した掘立柱南北棟建物。SB2549~2551・2552は、ともに梁行1.5m(5尺)。桁行は、SB2550が2.1m(7尺)、SB2551が1.5m(5尺)、SB2552が1.8m(6尺)である。SB2551は総柱建物。SB2555も梁行1.5m(5尺)の総柱建物だろう。

SB2552は、梁行1.65m(5.5尺)、桁行1.8m(6尺)の南北棟。SB2559は、梁行1.95m(6.5尺)、桁行1.8m(6尺)の南北棟。SB2552・2555・2559は柱穴が重複し、SB2559が他の2棟より古い。掘立柱南北塀SA2526は柱間2.1m(7尺)、SA2534



山田道第2・3次調査構造配図

は柱間約2m。

これらの掘立柱建物を区画するように、2ヶ所の掘立柱建物・塀の間に北で東に振れる南北溝4条がある。SD2524は最大幅1.0m、深さ0.3m。SD2525は幅1~1.3m、深さ0.3m。埋土はともに砂や小石を含んだ暗灰色粘土で、SD2525は底に粗砂が溜る。SD2530は幅1.5m、深さ0.2m、埋土は暗灰色砂質土。SD2539は幅1.7m、深さ0.25m、埋土は暗灰色粘土。これらの南北溝は掘立柱建物・塀と方位を同じくし、同時期と思われるが、重複するものがある。SD2525はSA2526・SB2518より古く、SD2524はSB2518より新しい。

第3次調査区で検出した建物は1棟のみである。掘立柱建物SB2631は東西4間（柱間2.4m、8尺等間）×南北2間以上（柱間2.1m、7尺）の規模で、大部分の柱穴は地山面で検出されたが、東端の2個のみは整地土から掘り込んでいた。しかも南北溝SD2625に切られているので、7世紀後半に位置づけられる。掘形は一辺1m内外の隅丸方形だが、浅く柱痕跡も残っていない。北で若干西に振れる。

これらの遺構は、出土遺物や第1次調査の成果からみて、7世紀中頃から後半にあたる。

石組暗渠を伴う大規模な整地 現在の地形でもわかるように、調査地は全体に西に緩く傾斜し、雷丘との間が谷状の地形となっている。第2次調査東区の東西両端では高低差が約1.5mある。東区中央部以西の遺構検出面である青灰色砂質土と青灰色砂混じり暗灰色粘土そしてその下層の黒褐色粘土は、この谷状の地形を埋め立てた大規模な整地土層である。整地土層は西方へも広がり、第3次調査区の西部まで続き、東西幅は110mにも達する。谷状地形の西端部はほぼ方眼方位に則って直に立ち上がっており（SX2630）、落込みに沿って堆積した黒褐色土から6世紀末に位置づけられる「飛鳥寺下層」式の土器類が一括して出土した。整地は植物繊維を多量に含んだ堆積層の上に施されているが、大きくは2層に分かれ、粘質の土を下層に積み、上層には青灰色の砂を置く。整地土は厚さ0.6mほどあり、旧地形に沿って北で厚くなる。この整地土中には、7世紀前半の土器と、小量の瓦を含む。また、青灰色の砂層には6世紀代の円

筒埴輪の破片も含まれていた。

整地土下には3条の石詰め暗渠がある。3条とも浅い据え付けの溝を掘った中に作られ、整地土で埋め立てられているので、整地作業と一連の工程によるものである。

東西方向の石詰め暗渠SX2601は幅0.8~1m、東でわずかに北に振れる。石は、拳大から一抱もある大きさまであって一定しない。石の積み方はかなり粗雑である。底石や側石ではなく、一定の幅に石を積み上げただけで、石に隙間を作ることによって水の通り道としたようである。検出した東西方向の長さは約80mである。東では南北方向の石組石詰め暗渠SX2600に接続し、西では南北暗渠SX2622につながる。SX2600は、長さ0.4~0.6mほどの大型の石をたてて側石とし、溝の中に人頭大の石を詰める。幅約0.5m、深さ0.7m、北でわずかに



山田道第2次調査東区 暗渠SX2600・SX2601実測図（1:50）

西に散れる。南北約4m分を検出した。南端では小口に側石を立てていない。石の上面には粘土を厚さ10~15cm、幅約1.6mほどかぶせて密封するが、SX2601との接続部分ではこの粘土を剥し、SX2600の西側石に棟原石の大型板石をかぶせている。SX2622は北へゆくほど幅を増している。2条の南北方向暗渠SX2600と2622は、傾斜変換線に作られたSX2601が受けた水を北へ排水するものであろう。

7世紀末~8世紀の遺構 SD2540は調査区の北壁にそって検出した東西方向の素掘り溝である。東端は調査区北外にそれる。第2次西区で確認した溝幅は約2.5m、深さは0.3m~0.6m。先に述べた整地土層を切り込んで掘削されており、また調査区東端の掘立柱建物や南北溝などより新しい。7世紀末~8世紀前半の土器を含む。東区西部や西区ではこのSD2540の南には少數の溝や土坑があるだけで顕著な遺構がなかった。この部分が道路SF2607で、SD2540はその北側溝であった可能性が高い。SD2540は第3次調査区へと延び、40m西で南北方向のSD2625と合流することを調査区の壁面で確認した。

第3次調査区中央部に3条の南北溝SD2623・2624・2625が等間隔で並ぶ。いずれも素掘りの浅いU字溝で、北流する。堆積土は粗砂で多量の土器類の他、金銅製鈴、帶金具、和同開珎が出土した。これらの土器の年代、および青灰色整地土面で検出したこと、またSD2625には調査区北端の東西溝SD2540が合流しているので、これらは7世紀末~8世紀前半のものと考えられる。

石敷SX2633は西部南半に広がる疊層で、人工的に敷いた可能性が強い。北端は中世の溝SD2636で切られているが、東西溝SD2627を北側溝とする路面敷きの可能性もあり、東のSF2607に対応するかもしれない。

## 遺 物

木簡 第3次調査において4点出土した。うち1点は削屑である。

(1) • □□マ □□□□

亀甘マ 伊艾□

• □□□ (SD2623出土)

(2) 僧□□ (SD2625出土)

瓦塊類 第2・3次調査で出土した瓦塊類は、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・

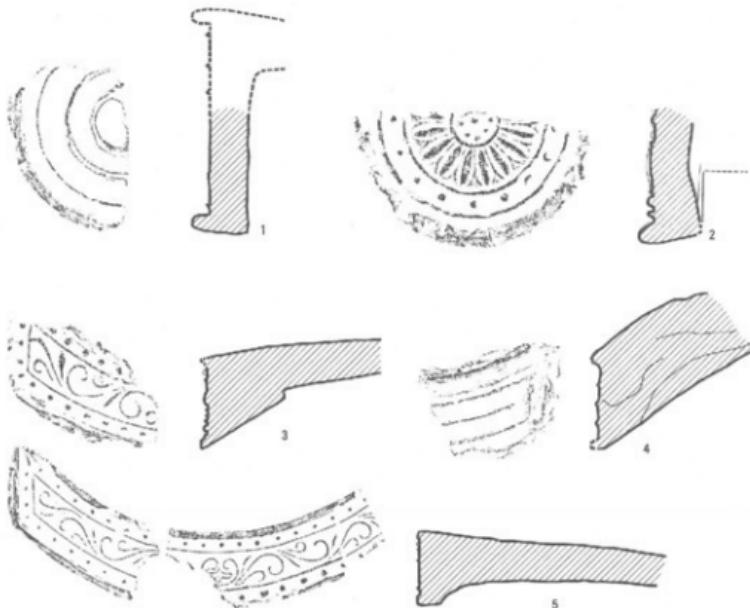
瓦製土管などである。軒瓦は第3次調査区から軒丸瓦6点、軒平瓦6点の計12点が出土した。藤原宮式軒丸瓦1点(6274型式Ab種)を除いて、すべて奈良時代の軒瓦である。その内訳は、以下の通りである。

軒丸瓦：平城宮6285型式A種2点、同6296型式A種1点、難波宮6014型式1点、奈良時代型式不明1点。

軒平瓦：平城宮6691型式F種3点、同6721型式D種1点、6574型式新種1点、難波宮6664型式B種1点。

(1)は三重圓の重圓紋軒丸瓦。外側の第三圓と外縁との間が狭く、外縁は直立気味の傾斜線。難波宮6014と胎土・焼成も酷似し、同范とみて間違いない。(2)は平城宮6296と同范。

難波宮6664B(3)は3回反転均整唐草紋軒平瓦。花頭形中心飾り基部は2本線、先端がわずかに開く。難波宮出土品と胎土や製作技法が一致する。6691F(5)は



山田道第3次調査出土軒瓦(1:4)

四回反転均整唐草紋。花頭形中心飾り基部は一本線で、先端が開かない。第1次調査でも1点出土した。(4)は重郭紋軒平瓦。一重の方郭内に弧線を一条入れる。平城宮・難波宮の6574のいずれとも別范。この他、第1次調査で平城宮6320型式A種(a・b不明)が出土している。

丸・平瓦は、整地土から少量の飛鳥時代の瓦が出土したが、第3次調査の瓦は平瓦が圧倒的に多く、ほとんどが縦位繩叩き一枚作りの奈良時代のもの。側面と端面に繩叩きを行うものがある。歌姫西瓦窯の製品か。

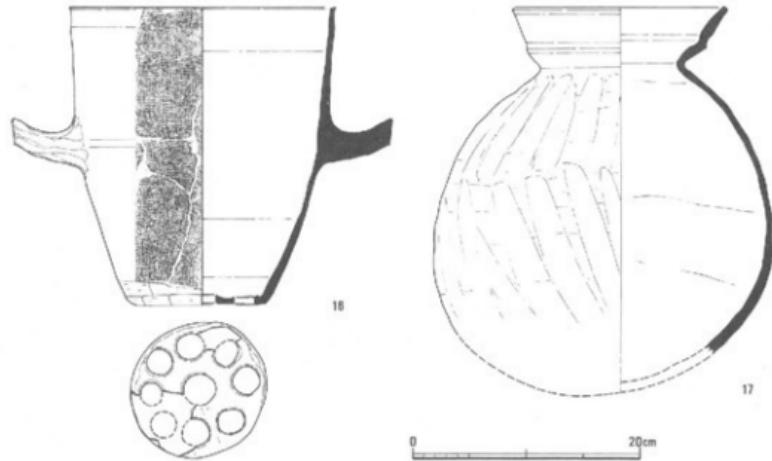
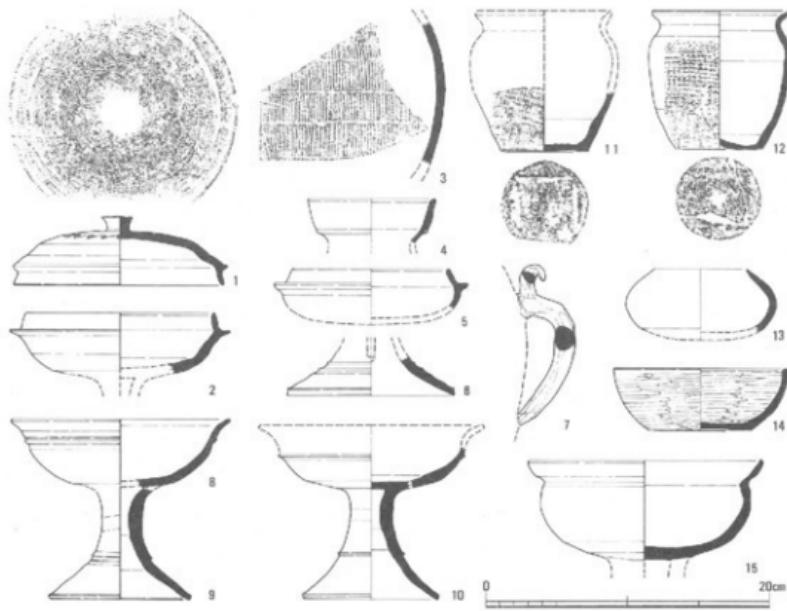
以上の奈良時代の軒瓦のうち、平城宮のものは6285Aを除いて第III-1・2期の型式である。6691Fは平城宮よりも平城京での出土が目立つ。6691Aは平城宮では、6320Abあるいは6296Aと組み合っており、今回出土した6691Fもこれらと組み合っていた可能性がある。また、6285Aは軒平瓦6667Aと組み、6285B-6691A(法隆寺東院・東大寺仏龕屋下層)の祖形となったものである。

難波宮の所用瓦の出土も注目される。調査地近辺では、中心に「右」の逆字をいれた重圈紋軒丸瓦(6015A)が藤原宮西北隅(第36次)から出土していることが知られるだけであった。今回出土した難波宮同范瓦は、小治田宮との関連からも今後の調査検討を必要としよう。

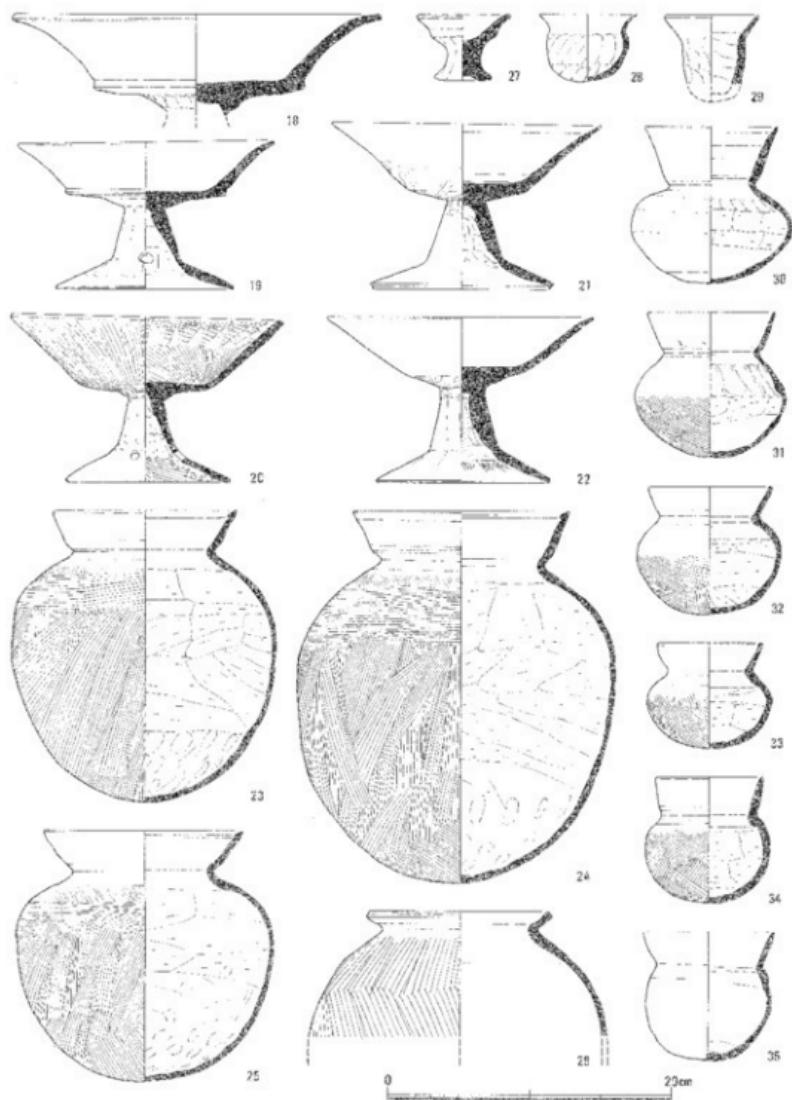
**土器類** 時期の上では弥生時代中期、後期、古墳時代前期末、6世紀末、7世紀前半、7世紀末から8世紀前半の土器が比較的多量にあり、飛鳥地域の遺跡の変遷をたどる上で重要である。いずれも整理途上にあり、ここでは、飛鳥地域の開発を示す、2つの時期の土器群について、簡単に紹介する。

古墳時代の河川跡SD2570から出土した土器群は、上・中・下の3層に大別される。下層は土師器ばかりであるが、上・中層には多量の土師器に混じって、硬質・軟質の朝鮮半島系の上器が少量含まれている。しかし陶邑窯産の初期須恵器とみられるものは含まれていない。ここでは、朝鮮半島系の土器の大半と、それに伴う上層出土の土師器を抽出して図示した。

朝鮮半島系土器の器種は、硬質のものに有蓋高杯(2・5・6)、蓋(1)、繩帶文叩き壺(3)、甕、小型壺(4)、把手(7)などがあり、軟質のものには、無蓋高杯(8・9・10)、杯(13・14)、平底鉢形土器(11・12)、甕、壺(17)、瓶(16)、



SD2570出土土器① (1~7:硬質, 8~17:軟質, 16・17は%, 他は%)



SD257C出土土器② (18~35: 土師器, 27・28は下層、他は上層)

台付鉢（15）などがある。いずれも各器種1～数点と少量であるうえに、胎土・色調・調整手法をも加味すると、それぞれで異なる特徴がある。

硬質の有蓋高杯（2）と蓋（1）は、砂粒の多い胎土で、白色の灰が厚くかぶった灰色を呈する点で互いに酷似している。壺口縁（4）、有蓋高杯（5）、高杯脚（6）も硬質で、精良な胎土と灰緑色の光沢のある色調が共通している。繩帶文叩きの壺（3）は細かな砂粒の多い胎土で青灰色。把手（7）は鉢あるいは壺の把手とみられ、上部に形骸化した鰐形の飾りがある。暗赤色。

軟質の無蓋高杯（8～10）は、ともに須恵器に通ずる器形であるが、（8）は全面黒色で表面は磨いているようである。（10）は明るい黄褐色を呈し、杯部底をロクロ削りで仕上げており、「赤焼上器」に似ている。二重口縁の壺（17）は、上師器壺に類似した器形であるが、粗雑なでと軽い鰐削りによる調整と白灰色の色調は半島系土器であることを示している。

軟質の平底鉢形土器の外面調整手法には、格子叩き（12）、平行叩き、繩帶文叩き（11）の別があり、底には方形の圧痕がある。なお（12）の底には中央に絞り上げたような円錐形の盛り上がりがあり、成形法と関わる点で興味深い。茶褐色の台付鉢（15）はあまり類例が無いが、金海地域の陶質土器に類似した器形がみられる。杯（13・14）も希有な資料であり、中でも（14）は無蓋高杯（8）と同じく、漆黒色で内外面を磨いている。壺（16）は円筒形平底の体部中程に棒状の把手をつけ、底に小円孔を穿つ。体部は細かな格子叩き。把手の高さに浅く幅広い沈線が部分的に巡る。他に「く」字形に外反する短い口縁をもつ細かい平行叩きの壺があり、やや広い面をなす端部に沈線を刻む。

これらと伴出する土師器には、壺・壺・小型丸底上器・高杯などがある。飛鳥地域の古式上師器の細分をした木下・安達論文の型式分類に従うと、壺では、口縁部が内側に面をなして肥厚する壺Abがその大半を占め、壺Acがそれに次ぐものの、壺Aaは見られない。また、安達分類のⅢB～ⅣA類のS字状口縁台付壺（26）が少量含まれる。高杯は、大きく外反する杯部で、脚部との境を鰐削りする高杯Ab・Acが主体を占め、杯部が椀形のものは全くない。上層には、わずかに数個体、杯部内外面と脚部裏内面を刷毛目調整するもの（20）が含まれる。

れる。脚の透かし孔は、1個(19)、あるいは3個(20)のものがあるが、大半は、透かし孔を穿っていない。この点では上・中層と下層とにおいての差はみられない。小型丸底土器では、外面を刷毛目調整するD・E類が主体で、中・下層に外面を削る個体が含まれる。なお、少量のミニチュア土器(27~29)が上・下層から出土している。

こうした内容は、遺構の東750mに位置する「上ノ井手遺跡」の井戸SE031上層・下層に類似し、須恵器出現期直前の様相を示す一括資料として極めて良好である。土器群の上・中層に限って、朝鮮半島系の土器が伴出することは、飛鳥地域にこれらが流入した時期の土師器を限定できる点でも貴重で、それら朝鮮半島系土器が渡来人の什器であるとするならば、飛鳥地域に配置され、その開発の一翼を担った渡来人の出自・構成などをさぐる手がかりになろう。

いま一つの飛鳥の開発とかかわる土器群は、3次調査西端の整形した地山に沿って堆積した土層である黒褐色土に含まれる土器群である。黒褐色土は、7世紀に継続的に営まれる飛鳥地域の本格的な開発の開始と深く関わると考えられ、含まれる土器群は、飛鳥寺造営直前の時期を示す。須恵器・土師器があり、須恵器杯は大きくはTK43型式に属す。土師器は杯類が、暗文をもたない杯Gと底部の外面を箆削りする杯Hで構成され、壺・壺類も小墾田宮推定地SD50下層資料と酷似している。量的に恵まれないが、須恵器は從来、6世紀末の年代基準とされてきた飛鳥寺下層の上器より良好である。黒褐色土層の上層にあたる「整地土」の土器が、飛鳥地域土器編年のI段階にあり、これ以後の年代的推移は主に土師器の型式変遷が手がかりとなっていることからすれば、土師器杯G・Hを連続的に検討することのできる点でも貴重な資料である。

金属製品その他 金属製品には第3次調査の南北溝(SD2624・2625)から出土した金銅製鉈、鉄製鎖状金具、黒漆塗帶金具、および隸開の和同開称があり、遺構の存続時期・性格を示唆する。遺構を覆う包含層からは隆平永寶が出土しており、「小治田宮」の記録との関連は興味深い。

土製品では、先述の南北溝に土馬があり、「万口」(須恵器杯B底部外面)、「日置」(須恵器蓋天井部外面)の墨書き土器がある。その他、包含層からは、円面

観、製塙土器、漆付着の土器、埴輪等が出土している。

石製品には砥石の他、弥生時代の石匙、縄文時代の石棒等がある。

木製品では、古墳時代の河川跡SD2570出土の木製鞘が貴重な資料である。

#### ま と め

第1次調査以来、推定「山田道」の北側を平均幅8m、総延長420mにわたって調査してきた。これはいわば飛鳥地域の中央部を貫通する東西方向のトレンドを入れたことになり、古代におけるこの地の利用状況の一端を窺うことができたのは大きな収穫である。

遺構としては未確認であるが、石棒などの遺物が出土しており、縄文晩期には人々が生活し始めていた可能性が強い。間が途切れるが、弥生中期末になると、比較的多くの遺構が主として東半部の微高地に営まれるようになった。このうち、第2次調査区東端のSD2510は集落を囲む環濠の西の一部である可能性が強く、古墳時代になると、重複した竪穴住居や多量の土器を含む溝などの存在によって、継続的な土地利用が想定できる。

古代に関わる最大の成果は、第2次調査東区西部から第3次調査区の東3分の2にわたる東西幅110mを超える沼状地形の存在である。この沼状地形は、塊石を詰めた暗渠を作り大規模な整地によって埋め立てられており、さらに北方へと大きく広がっていると思われる。整地上は現状でも厚さ60cmあって、しかも北へゆくほど厚くなるので、きわめて大規模な土木工事であったと思われる。飛鳥盆地北部の大官大寺周辺でも黄褐色の山上を含むもう一つ別の整地上の広がりが確認されており、7世紀前半における飛鳥地域の大開発を物語るものである。

第3次調査区の西方一帯に「雷丘東方遺跡」が広がる。「小治田宮」墨書き土器の出土によって奈良時代の小治田宮がこの地域に存在した可能性が強まったのであるが、第5次調査区西部から11点もの奈良時代軒瓦とそれに伴う丸・平瓦がかなりの量出土したことによって、その蓋然性はますます高まった。特に難波宮と同範の軒瓦の出土が注目され、今後行う周辺の調査にますます期待がかかるのである。

## 2 石神遺跡第9次調査

(1990年7月～1991年4月)

1981年からはじまった石神遺跡の調査は今回で9回目となった。これまで、旧飛鳥小学校東側の南北里道に沿って調査区を北へ進めてきており、今回も第8次調査区の北に接する水田を対象とした。調査面積は約1200m<sup>2</sup>で、第1次調査からの調査総面積は約10450m<sup>2</sup>に達する。

### 遺構

調査区の基本的な層序は、耕土、床土、灰褐色土、茶褐色土、暗褐色土で、その下が黒褐色土の整地土面となる。遺構はこの整地上面で検出したが、西10mほどは後世、整地土面が失われている部分が多く、地山の青灰色微砂土面が検出面となつた。また、東南部部分は灰褐色土下がすぐ黒褐色整地土面となる。全体の自然地形は西北へ傾斜する。両半部分は東西の地山面の比高差はほとんどないが、北端では約55cm、南北の比高差は東端で約40cm、西端では約1mとなる。検出した主な遺構は、7世紀中頃から8世紀にわたるもので、これらは大きくA期（7世紀中頃：齊明朝）、B期（7世紀後半：天武朝）、C期（7世紀末～8世紀初頭：藤原宮朝）、D期（8世紀前半：奈良時代）にわけられる。A～C期については第8次調査の報告（謹報19）の時期区分と同様であるが、今回は奈良時代に属する遺構を検出したので、これをD期とした。

<A期>飛鳥寺・水落遺跡の北に東西大垣SA600ができ、石神遺跡の形成された時期である。従来、第4次調査で検出した井戸SE800から発する石組溝と建物の変遷から3小期に細分されており、今回もこれを踏襲する。

（A-1期） 石組溝SD1210・1345、掘立柱建物SB1550、掘立柱塀SA1524・1525がある。調査区中央を走る南北石組溝SD1210は、第7次調査で初めて検出したものである。最下段の側石しか残っていないが、40cm大の石をつかう。内法幅20cmで、砂がいっぱいに堆積していた。北にさらにのびる。南北石組溝SD1345は第8次調査で検出したもので、後述のA-2期の南北石組溝SD900のすぐ東にある。調査区北端近くで、2.5m分を確認した。内法幅1.5mで、側石は東

は20~25cm大の1段分、西は10~20cm大の石が2~3段残っていた。溝中は砂が堆積する。第8次調査では幅1mであったが、今回は調査区北半部で幅が広がる。溝幅からみて開渠であろう。この溝も井戸SE800から発するものか。SB1550は調査区西壁面に東側柱列5間分を検出したものである。A-3期のSB1545の柱掘形と重複し、これよりも古い。柱掘形は一辺約1.2mと大きい。柱間寸法は2m。南北塀SA1524は4間分を検出。柱間寸法2.2m。これと逆L字状に接続する東西塀SA1525は2間である。柱間寸法2.2m。西側の柱掘形はA-2期のSB1540と重複し、これよりも古い。SB1550の南側柱はSA1525とほぼ揃う。

(A-2期) 石組溝SD900・1520、掘立柱建物SB1485・1325・1530・1540がある。井戸SE800から発する南北石組溝SD900は調査区のさらに北へのびており、総延長は120mをこえる。溝掘形の幅約2m、石組の内法幅65~85cmで、側石はほとんど最下段しか残っていない。50~60cm大の石を横長におき、下端のすき間に小石をつめる。底石はない。石組内には砂質土が堆積していた。内法幅はこれまで50~60cm前後であるが、今回はやや広くなっており、北で東にやや振れてきている。この溝は暗渠と考えてきているが、第8次調査の東西棟建物SB1320の北側から開渠となっていた可能性がある。SD900の東側約4.5mに南北棟建物SB1485とSB1325とが東側柱筋を削えて南北に並ぶ。SB1485は桁行9間・梁行3間で、柱間寸法は桁行2~2.1m・梁行1.4mである。東側柱から約60cm東の位置に、東側に面を削えた南北石列SX1486がごく一部であるが残っており、この建物の基壇縁石と考えられる。内側にもう1石を並べている。建物基壇には黄褐色山土が入っているが、柱をたてた後に基壇土を入れているため、上面では柱掘形はみえず、柱抜取穴が不整円形にみえるだけである。柱掘形は一辺1.2m前後の大きさで、深さ約80cmだが、梁行の中の間の柱は一辺70cm前後と小さく、深さも他の柱より20~30cm浅い。SB1325は第8次調査で南北柱列を2間分検出していたが、今回、北側柱列を検出した結果、桁行4間・梁行2間の南北棟建物となった。柱間寸法は桁行2m・梁行2.3mとなる。柱掘形はSB1485と同様、側柱列は大きいが、妻柱は小さい。この建物部分にも基壇土の黄褐色山土がのっており、SB1485と一連の作業工程がうかがえる。両者の間隔は



### 石神遺跡第9次調査遺構配置図

2mしかなく、極めて近接した状況である。この2棟の南北棟は第8次調査区の東西棟建物SB1320と東側柱列を揃え、逆L字状に並ぶ。方位は北でやや東に振れる。石組溝SD900の西約13.5mには、建物SB1530とSB1540とが東側柱列をほぼ揃え、約7.5mの間隔をもって南北に並ぶ。両者とも東西3間・南北3間の総柱建物である。SB1530は柱間寸法が1.4m等間で正方形である。SB1540は東西1.9m・南北1.4mの東西棟建物である。柱掘形は両者とも一辺90cm前後で、各々1本ずつ柱根が残る。南北石組溝SD1520は内法幅約30cmで、20cm大の側石が1段残る。底に5~10cm大の礫をしく。SB1530・SB1540の東側柱列から約1.5mで、両建物の雨落溝と考えられる。

(A-3期) 南北石組溝SD900は存続するが、他の建物はすべてこわされる。獨立柱建物SB1480・1500・1510・1535・1545がある。石組溝SD900の東区画には特異な平面形態のSB1480が建つ。西側部分のみで東側は調査区外となるため、全体の規模・形状は明らかではないが、現状では、2間×2間の空間が四方に突出した十字形の建物の可能性がある。建物内部には柱がない。柱間は2.5m等間で、建物の南北長は15mである。柱掘形は一辺1~1.5mと大きく、西側柱列の彌形にはA-2期SB1485の基壇縁石に使われていたとみられる礫が入る。柱掘形の深さは約80cmであるが、西側柱列の妻柱は約35cmと浅い。また、この時期に特徴的な黄色粘土をつめ込んだ柱抜取穴はみられない。建物方位が北で東にやや振れる。石組溝の西方には総柱建物を中心とした建物群がある。SD900の西約1.5mにSB1500とSB1510が西側柱列をほぼ揃え、約20mの間隔で並ぶ。SB1500は3間×3間の総柱建物で、柱間寸法は東西1.6m・南北2.1mである。柱抜取穴に黄色粘土が入るものがある。方位が北で東に振れる。SB1510は梁行2間の南北棟建物と思われる。桁行は1間分のみの検出で調査区外へのびる。柱間寸法は桁行1.5m・梁行2mである。これらの建物の西11.5~12.5mにはA-2期の総柱建物をこわし、やや北西にずらして総柱建物SB1535・1545をつくる。両者の間隔は約8.5mで南北に並ぶ。SB1535は南北3間・東西は2間分検出したが、調査区外に1間のびて3間になると思われる。柱間寸法は東西1.8m・南北2.2m、柱掘形は一辺1~1.5mと大きく、北側からの柱抜取穴

がある。抜取の埋土には焼土が混じる。SB1545は東西3間、南北は2間分だが調査区外にのびて3間になると思われる。柱間寸法は東西1.5m・南北2.1m、柱掘形は一辺0.7~1mで、焼土・礫の入った柱抜取穴がある。

＜B期＞ A期の遺構がすべてこわされ、新たに整地して前代とは全く遺構の配置が異なる時期である。調査区西側に掘立柱建物SB1515・1505、その東に南北塀SA1490、調査区東端に南北塀SA1475がある。SB1515は桁行12間以上・梁行3間の長大な南北棟建物である。柱間寸法は桁行2.3~2.4m・梁行2.1m、南北長は28.2m(12間分)以上になる。柱掘形は一辺1~1.2mである。北で西にやや振れる方位をもつ。この建物の東約2mには布掘りの柱掘形をもつSB1505がある。桁行4間・梁行3間の縦柱建物である。布掘りは幅約1m、長さ5.7mの東西方向の溝状で、全体を一段掘り下げた後、柱位置だけさらに約50cm深く掘る。柱間寸法は東西1.5m・南北1.9mで、北側柱・南側柱列はSB1515の柱位置とほぼ揃う。SB1505の東約3m、A期の石組溝SD900のすぐ東には南北塀SA1490がある。調査区内11間分検出。柱間寸法は2.3~2.4m。柱掘形は一辺約0.9mで、黄色粘質土が多く入り、東からの柱抜取穴がある。柱位置はSB1515の柱間のほぼ中央になる。調査区東端にある南北塀SA1475は10間分検出した。柱間寸法は2.1m。北で西にやや振れる。SA1490との間約15.5mは遺構なし。

＜C期＞ B期の遺構はすべてこわされる。南北溝2条がある。SD1347は石組溝SD900のすぐ東の南北溝で、南から続く南北道路の西側溝SD640が第8次調査区で折れ曲り、約14mほど西に流路を変えたものである。当初は幅2.5mの素掘り溝であるが(SD1347A)、後に西側に50cm大の石を雜に並べて護岸する(SD1347B)。溝内堆積土の砂層中からは多量の土器類が出土。調査区東端近くにある南北素掘り溝SD1476は幅0.7~1.2mで、西半が1段深くなる。深さ約30~40cm。方位が北で西にやや振れる。

＜D期＞ 掘立柱建物SB1478・1491、井戸SE1481がある。SB1478は桁行4間・梁行2間の南北棟建物である。柱間寸法は桁行1.9m・梁行2.1m、柱掘形は一辺40~70cmである。方位が北で西にやや振れる。SB1491は南側柱3間を検出した。柱間寸法は1.8m。南北溝SD1476と重複し、これより新しい井戸SE1481は、

径約2mの円形掘形の中央南寄りに石組の井戸枠がある。石組は最下段が残るのみである。最下段は20~30cm大の石を内法一辺約70cmの方形に据えている。上部石積は序々に円形となるのであろう。底面は小礫を敷く。検出面からの深さは1.05mである。廃絶時の埋土から墨書き土器出土。

#### 出土遺物

多量の土器類の他、瓦、金属製品、木製品、石製品などがある。土器類では、南北溝SD1347、土坑、整地土などから7世紀前半から8世紀前半の土師器・須恵器が出上した。他に縄文土器・弥生土器・瓦器などが少量ある。土製品には、土馬・硯・フイゴ羽口などがある。墨書き土器はSE1481から2点出土した。1点は土師器皿口縁部外面に「上」、もう1点は土師器腹体部外面に「来田口司」と記す。瓦の出土量はごくわずかである。金属製品では鉄製の釘・鐵・刀子・斧・紡錘車・鎌・カスガイなどがあるが、これまでの調査区と比べると全体の量は少ない。木製品ではA-2期の整地以前の、木屑を多く含む砂質土中から斎串が出土。石製品には磁石の他、管玉・勾玉・石鎌・石刀・石包丁などがあり、縄文時代から古墳時代にかけてのものが多い。

#### まとめ

前回の調査では、各時期の主要遺構がまとまりをみせた。特にA-3期では、長大な建物で形成する狹長な東区画と長廊状建物で囲む西区画の両者について、その北を画する建物を検出した。こうした状況から、今回の遺構のあり方が注目された。その結果、石神遺跡の北を限る施設は検出されず、各時期ともに遺構がさらに北に続くことが明らかとなった。以下、今回の調査成果をこれまでの調査結果と総合して簡単にまとめておく。

<A-1・2期> 飛鳥寺・水落遺跡との間を区画する東西大垣の北は約40mの空闊地をもって、石敷を伴う井戸とその周囲に建物群がつくられ、井戸から発する石組溝が北へのびる。今回の調査では、A-1・2期の建物・塀を検出し、特にA-2期について、北方にまとまった建物群があることが明らかとなった。第8次調査で検出した東西棟SB1320と逆L字状に2棟の南北棟建物が東側柱列を揃えて建ち、西南には東西棟SB1340がある。西北方には縦柱建物2



石神遺跡主要遺構變遷圖

棟が南北に東側柱列を揃えて並ぶ。総柱建物は、その規模からみて倉庫と思われる。井戸周辺の建物群は東西棟中心だが、西北の位置に今回と同規模の総柱建物があり、両者とも同様の建物群構成とみられる。

〈A-3期〉 最も遺構が整い、大きく東西2区画に分れる時期である。前回の調査区で東西区画ともその北辺の建物を検出した。これにより、東区画は井戸の北に長大な建物で囲む外周東西24.7m・南北49.4mの狭長な空間がつくられる。西区画は長廊状建物で囲まれた状況が明らかとなった。今回、東区画の北方では約30mの間をおいて、特異な平面形をなす建物の存在が明らかとなつた。残念ながら全体の規模・形状は明らかではないが、石神遺跡の特殊な建物配置をもつ空間がさらに北へのびていることが想定される。一方、西区画の北方には総柱建物を中心とした建物が並んでおり、倉庫群があったことが判った。A-2期にもこの一画は倉庫が建っているが、A-3期には東西両区画の倉庫群がこの位置にあったことになる。

〈B期〉 南面大垣はやや南にずらして建てかえられるが、A期の建物群はすべて取りこわされ、南北塀によって区切られる空間に総柱建物・南北棟建物が配置される。A期とは全く異なる遺構の状況であり、遺跡の性格が変わったことがうかがわれる。今回も南北塀と南北棟建物を検出し、これまでと同様の状況がさらに北に続くこととなった。ただ、今回検出した南北棟建物は桁行12間以上という大型建物であり、この時期の中心的な建物の一つと思われる。

〈C期〉 B期の遺構はすべてこわされる。東側に南北道路が通り、その西の掘立柱塀で囲む大きな区画の中に建物・井戸などが点在する。前回調査区から遺構は希薄となってきており、今回も西側には遺構は検出されなかった。

〈D期〉 今回の調査では、新たに奈良時代初期の遺構を検出した。石組の井戸SE1481とその周辺に小規模な建物がある。井戸からは墨書き器も出土しており、奈良時代の遺構がこのあたりから北方に存在することをうかがわせる。

以上のように南面大垣から北へ約160mまで調査が進んできたが、各時期とも遺構がさらに北へ延びることとなった。こうしたことから、遺跡の性格・機能の解明にむけて、今後の調査の進展が大いに期待される。

### 3 坂田寺第6次調査

(1990年5月～8月)

#### はじめに

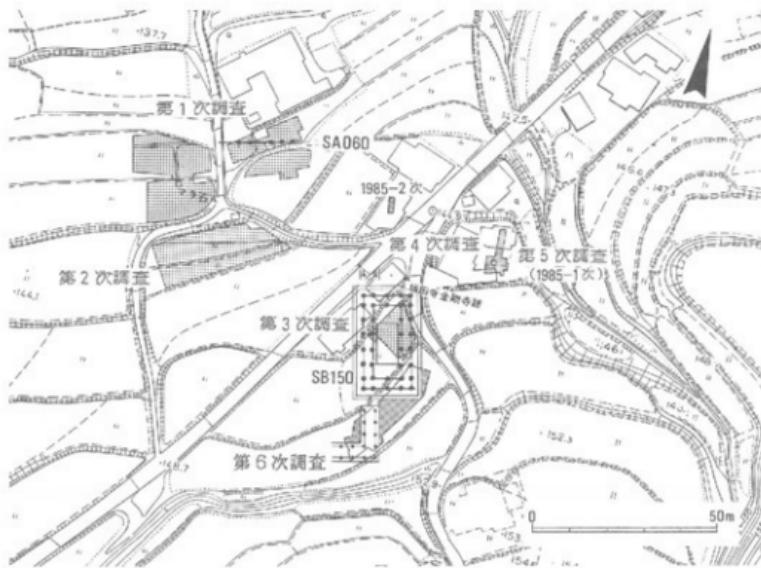
この調査は奈良県の史跡整備に伴う広場・園路工事のための事前調査として、高市郡明日香村大字坂田字古宮で行ったものである。

当調査部は、坂田寺周辺において、1972年以降5回の調査を行ってきた。今のところ、文献に記された6世紀代に遡るような遺構は見つかっていない。マラ石周辺で行った第1次(1972年)・第2次(1974年)調査では7～11世紀の遺構が発見された。7世紀前半には池、7世紀後半には溝・土坑などがあり、鞍作止利が寺を整備した頃のもの可能性がある。7世紀代を通じて、マラ石周辺には寺の主要伽藍は存在しない。8世紀代に入ると、井戸・石組溝・石敷・掘立柱塀などが作られ、9世紀になると、井戸が作り替えられる。8・9世紀にはマラ石周辺には、寺の主要伽藍からはずれた厨のような附属施設があった可能性が高い。マラ石の南側では、8世紀に大規模な整地土盛をして東西方向に続く段を設け、そこに石垣(高さ約2.5m)を築いており、伽藍の中樞部に近いことが想定された。「坂田寺金剛寺跡」の石碑の南側で行った第3次調査(1980年)では、8世紀後半に造営された西面する仏堂(SB150)が発見された。この建物は伽藍の中心建物の一つとみられ、基壇中央に須弥壇が築かれ、鎮壇具が埋納されていた。第4次調査(1982年)では、SB150の東北方でSB150と同じ方位の石組溝が発見され、玉石積基壇の一部と想定された。第5次調査(1985年)では、第4次調査区の東方で基壇土の一部と鎮壇具を埋納した土坑が見つかり、SB150と相前後して造営された基壇建物の存在が明かとなっている。

今回の調査地は第3次調査を行った水田の南側で、仏堂SB150の西南隅部にあたり、調査区南半には回廊等の存在が想定された。調査の結果、仏堂の規模・構造が確定したほか、その廃絶時の状況について新知見が得られた。回廊も想定通り検出でき、仏堂に取り付くことが判明した。また、仏堂の建築部材・壁、回廊の建築部材が比較的良好な状態で残っていた。

## 遺構

調査地の層序は、調査区の南四分の三と北四分の一で異なる。南四分の三では現地表下2mで花崗岩岩盤の平坦面に達する。この平坦面は、寺院造営以前に存在した南東から北西に延びる尾根を削って作られており、それを掘り込んだり上に築土を積んだりして、奈良時代の回廊SC170・180（後述）が営まれている。その上に下から順に、灰褐色砂質土（10~15cm）、楡皮や有機質を多量に含んだ黒色砂質土（5~10cm）、暗灰色系砂質土（40~50cm）、褐色系砂質土（70~80cm）、床上（35~45cm）、耕土（30cm）が堆積する。灰褐色砂質土はSC170・180が存続していた時期に回廊の南西側の山手から流れ込んだ土、黒色砂質土は回廊倒壊時の堆積物、暗灰色系砂質土・褐色系砂質土もやはり山手から流れ込んだ土である。調査区の北四分の一では、仏堂SB150（後述）南面基壇の東端付近から地山が東北に向かって下がり、寺院造営以前には東南から西北に流れる谷が形成されていた。谷の自然堆積層には7世紀前半の瓦が含まれ、その上面は調



坂田寺調査位置図（1：1500）

査区東壁で現地表下3.4mである。SB150は、谷部では自然堆積層上に厚く基壇上を積み、尾根部では平坦面を削り出しその上に薄く基壇上を積んで作られている。SB150が存続していた時に、南西側から多量の礫・瓦を含んだ土砂が押し寄せ、雨落溝を埋め尽くし、壁の破れ目から堂内に流れ込むに至った。土砂の上面は調査区東端で現地表下1.3m、西端では2.1mである。その後SB150が倒壊し、その上を厚く砂層が覆った。

検出した主要な遺構は仏堂SB150、回廊SC170・180などである。

仏堂SB150 長軸方向が北で西に約15°振れる南北棟で、西を正面とする。桁行5間・梁行2間の身舎の四面に庇がつく礎石建ちの基壇建物である。今調査では、基壇、建物東南隅部の礎石4個・柱・地覆・壁上、南雨落溝SD176A・B、東雨落溝SD177、基壇上の關伽棚の礎石SX179を検出した。

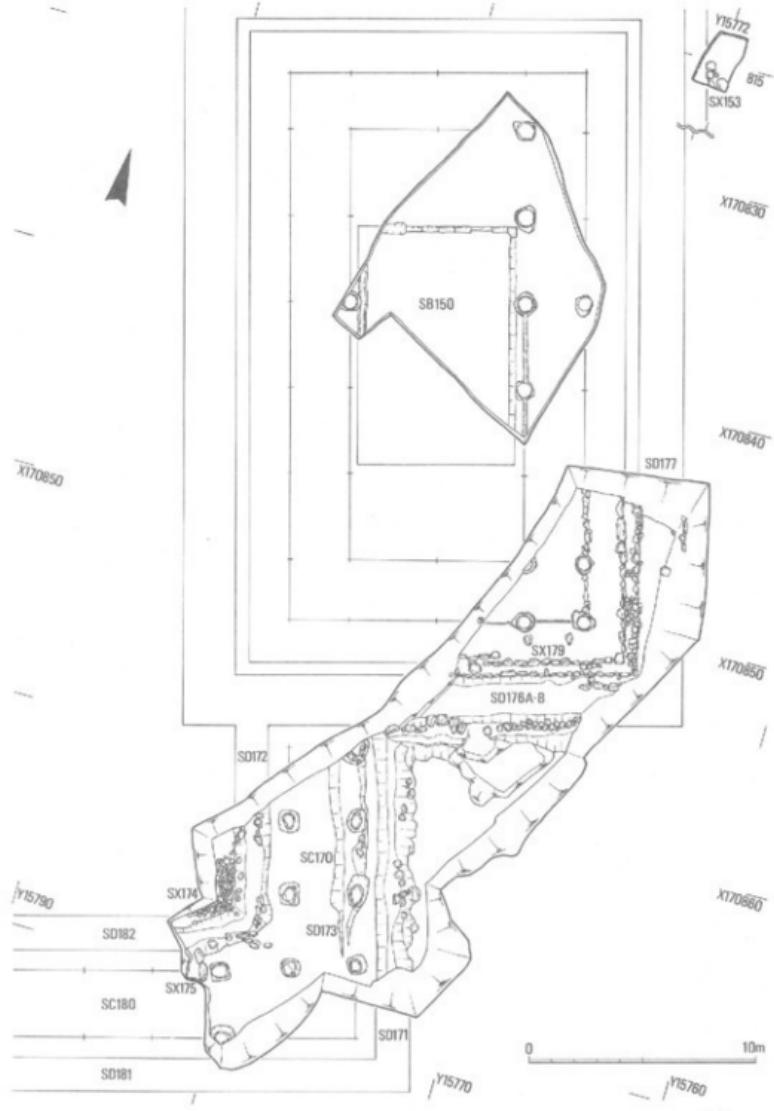
基壇の築成は、旧地形の尾根部分に基壇の南縁と西縁を区画する溝（幅3.5m・深さ1m）を穿ち、基壇本体を尾根から切り離し、その上面を一段削り下げ平坦面を作つてから、基壇に含まれる尾根部分ではその上に薄く版築し、谷部では自然堆積層の上に厚く版築することによってなされたと考えられる。基壇上面は基壇南側の尾根部分より約40cm低くなっている。版築土は厚いところでは8層積まれ、7世紀後半の瓦が出土した。

基壇は二重基壇で、下成基壇の規模が29.5m（100尺）×17.9m（61尺）、高さ0.6m、礎石心からの基壇の出が2.4m（8尺）、上成基壇が28.3m（95尺）×16.7m（56尺）、高さ0.4m、基壇の出が1.8m（6尺）である。基壇総高は1mであるが、これは雨落溝の底からの高さであり、基壇の上面と基壇の南外・西外との高さの差はほとんど無い。基壇化粧は上成・下成ともに方形の花崗岩自然石（一辺50cm前後）を一段並べるのを基本とし、東面の下成のみ方形の石の上に小さい石を積んで二段とする。下成基壇の上面には拳大から人頭大の石を敷き詰めている。上成基壇上面は黄褐色の粘質土で堅く固められており土間床であったらしい。基壇縁石は厚さ10cmほどの裏込め土に貼り付けるように据えられている。南面では上成基壇縁石が二重になったところが一部あり、改修を受けていると思われる。二重基壇の例には飛鳥寺東・西金堂、法隆寺金堂・塔、榆前寺金堂

など7世紀代の例があり、いずれも下成基壇が低く上成基壇が高い点が共通するのに対し、SB150の基壇は下成基壇が高い点で珍しい。

建物の柱間寸法は身舎が3.86m（13尺）等間、庇の出が2.68m（9尺）であり、桁行総長24.7m（83尺）、梁行全長13.1m（44尺）となる。礎石は径2m前後、深さ0.7m前後の掘え付け掘形の中に置かれ、礎石と穴の隙間には多量の礫が詰め込まれている。礎石は花崗岩を加工し円形柱座を造り出したもので、柱座径は62～68cmである。礎石3個の上には腐蝕した柱の根元部分が残り、柱の径は約55cmである。基壇上に堆積した砂層中から倒れた柱の可能性がある腐蝕した材を5点検出した。調査区西壁で南妻の地覆の上方には、倒れた柱の腐蝕した端部が見えている。側柱・妻柱の礎石間には、検出したすべての柱間について壁受けの地覆材と壁の根元部分が残っていた。地覆材は、礎石据え付け掘形を埋め戻した後に礎石と礎石をつなぐように掘られた掘え付け掘形（幅30cm・深さ30cm）の中に、自然石（幅20～30cm・長さ25～60cm）や方形塊（一辺30～40cm）・平瓦を並べた上に置かれている。地覆材は現状では上に乗る壁の重さでつぶれていが、一辺20cm前後の角材と復原できる。壁は厚さ15cmで木製の木舞を壁下地とし、それに黄灰色の壁上をつけて、表面には白土の仕上げを施している。東壁の南から2間目には柱間を三等分するよう配された腰壁束の痕跡が残っていた。東は一辺16cmの角材である。基壇上および周辺から8世紀後半代の軒瓦がまったく出土しないことから、檜皮葺の可能性が大きい。なお、南妻東から1間目の壁の外側に腰伽棚の礎石SX179がある。これは長さ40cmの石2個を壁から75cm離して1.8m間隔に並べたものである。

今回の調査でSB150の周囲の状況が判明した。当初、SB150の南面には幅3.5m・深さ1mの素掘り雨落溝SD176Aが設けられ回廊はなかった。この溝は、SB150基壇の築成時に基壇本体を尾根から切り離すために設けられた溝がそのまま雨落溝に転用されたものである。後に回廊SC170の建設に際し溝の南岸が石で護岸された（SD176B）。護岸を行う以前にSD176Aの底には厚さ30cmほど砂が堆積しており、護岸はこの砂層の上に径20～60cmの自然石を一段並べ裏込め土で固定することによって行われている。現状では石の並び方は雑で面は揃っていない。



坂田寺第3・4・6次調査遺構配図 (1 : 250)

ない。護岸石列からSB150下成基壇までの距離は2mである。SB150の東面には雨落溝SD177がある。東岸の護岸石列を長さ1.7mにわたって検出した。石列は長さ30~50cmの自然石を西に面を揃えて立て並べた物で、SB150下成基壇までの距離がSD176Bと同じ2mであるため、石列はSD176Bに対応する時期の物と考えられるが、SD176Aに対応する溝の存否は調査区外のため不明である。この石列と第4次調査区の石敷造構SX153との関係について触れておく。石列をまっすぐ北方へ延長すると、その西面はSX153中段石列の約1m西にくる。またSD177東岸石列とSX153下段石敷とは上面の標高がほぼ一致する。したがってSX153が3段の石積基壇とすれば、その下段にSD177東岸石列がつながる可能性がある。

SB150の廃絶時の状況については、第3次調査では焼失したものと考えられたが、今回新たな知見を得た。すなわち10世紀後半以前に建物の東南面から押し寄せた土砂で壁の根元まで埋まり、次第に立ち腐れの状況になり、建物内部にも壁際には土砂が流れ込んでいた。その後壁が倒れた。壁は東側柱筋ではおもに東へ倒れ、南妻柱筋ではおもに北へ倒れたとみられるが必ずしも一定していない。その直後、基壇・倒れた壁・流れ込んだ土砂の上面で仏像・部材などを焼却し焼上層が形成された。第3次調査で検出された基壇・須弥壇直上の焼土層はこれにあたる。焼土に含まれる土師器からみて、施材焼却は10世紀後半に行われたとみられる。その後、焼土層上には瓦を多く含む粘土層が薄く堆積し、その上を瓦・礫を多く含んだ砂層が厚く覆った。

回廊SC170・180 础石建ちの基壇建物で、SB150と主軸方向を揃えた南北回廊SC170と雨落溝SD171・172、それと直交する東西回廊SC180と雨落溝SD182を検出した。SC170・180はともに梁行1間の単廊である。

すでに述べたように回廊の建設はSB150より遅れる。回廊基壇の築成は、SB150の南側に一段高く残っていた尾根上に、南北回廊の東雨落溝と東西回廊の南雨落溝の予定位置で溝を掘り、溝の北西側を一段削り下げ平坦面を作つてから回廊内側の雨落溝を掘り、基壇上に5~10cmの厚さで基壇土を積んで行われたと考えられる。基壇上面はSB150基壇より約5~20cm高く、基壇東側の尾根

部分より約20~40cm低くなっている。

南北回廊SC170は、西柱列をSB150の西側柱列と揃えているが、SB150に直接には取り付かない可能性が大きい。なぜならSD176Bの南岸石列がSC170の基壇部分にも及んでおり、SB150とSC170とがSD176Bで分断されていたとみられるからである。この場合SC170の桁行は4間となる。柱間寸法は桁行3.3m(11尺)等間、梁行3m(10尺)である。SB150とSC170の間には橋が架けられていたと推定されるが、その当否は今後の調査で確認したい。SD176BがSC170基壇と重複する部分の南岸石列の裏込め上から平城IIの土師器が出土した。SC170の礎石据え付け掘形の1個がこの裏込め土を切っているため、SD176Aの時期にはSC170が無かったことが判る。SC170の基壇は化粧をしておらず、幅は東西両雨落溝の心々距離で約6.2m、溝肩間の距離で約4.7~4.9mである。基壇の出は礎石心から雨落溝肩までの距離で0.8~1mである。礎石は花崗岩の自然石で径60~100cmである。礎石は地山を浅く掘りくぼめて据え付けられ、その後地山上に薄く基壇土が積まれている。後述するように礎石付近には柱が倒れており、SC170の柱3本は東へ、SC180の柱2本は北へ倒れていた。東礎石列に重複して溝SD173がある。これは最入幅1.6m、深さ約10cmの浅い溝で、地覆の抜取り痕跡の可能性がある。東雨落溝SD171は、幅1.5m、基壇上面からの深さ約30cm、基壇東側の尾根部分からの深さ約50~70cmである。東壁面に人頭大の礫が散在している。現状では礫のほとんどが浮いているが、壁面に不整形の小穴が多数あり、そこに礫を据えて護岸していた可能性がある。最下層から平城IIIの土師器が出土した。西雨落溝SD172は、幅約1.6m、基壇上面からの深さ約30cm、基壇西側の礫敷舗装SX174からの深さ約40cmである。東西両壁面にSD171と同様に礫が散在し小穴もあることから、礫で護岸していた可能性がある。

東西回廊SC180の柱間寸法は桁行・梁行ともに3m(10尺)である。調査区西端の礎石の西側に石組施設SX175がある。これは長さ60~80cm、幅50~60cm、厚さ30~40cmの自然石5個を北に開いたコの字形に組んだもので、石を側壁に2個、奥壁に1個並べ、底石はなく天井も開放されている。いかなる機能を果たしたのか不明である。北雨落溝SD182は、幅約1.6m、深さ約40cmである。や

はり礎で護岸していた可能性がある。

基壇上および雨落溝内からは、連子窓など回廊の建築部材が多数出土した。部材については次項で触れる。連子窓および東拡張区の礎石の周囲から檜皮が相当量出土した。この事および丸・平瓦の出土が少なく、軒瓦が皆無であることからみて回廊は檜皮葺と考えられる。

回廊の内側には拳大の礎を敷きつめて舗装しているが、この舗装面SX174と回廊上面とは殆ど同じ高さである。

#### 遺 物

主要な出土遺物は、建築部材、瓦塊類、埴仏、土器、陶器類、金属製品、木心乾漆仏などである。

建築部材 SB150、SC170・180にともなうもので、種別が判明するのは、連子窓（連子子・樋）・地覆・柱・頭貫・大斗・卷斗・墓股などである。地点別では、SB150で柱・地覆、SC170・180基壇上で連子窓・柱、SD171で柱、SD182で柱・頭貫・大斗・卷斗・墓股が出土した。建物の基壇上およびSD171で検出した物の多くは腐蝕が進行しているが、SD182でまとまって出土した物は比較的残りがよい。

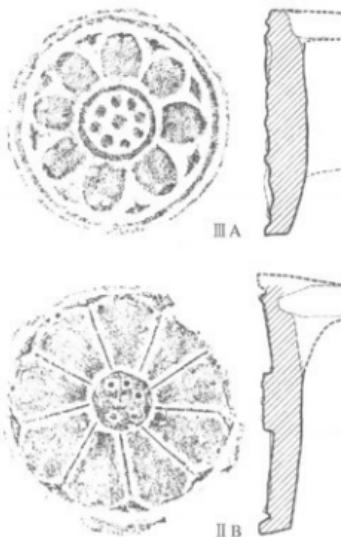
連子窓はSC170の東壁南から4間目るもので、連子子10本と樋が残っていた。連子子は14.7cm間隔（心間平均）に並び、現存長84cmで、断面形は菱形（6.5×5.5cm）である。樋は連子子に接した西側にあり腐蝕がひどく芯のみが残る。連子子の東側には現存長293cmで断面方形（18.5×9cm）の角材があるが、連子子を受ける納穴がなく腰長押か腰貫と考えられる。柱は5本が対応する礎石の近くに倒れていた。現存最大長200cmである。SD182に倒れ込んでいた最も残りの良い物でみると、若干のエンタシスが認められ最大径は32cm、頂部には丸太枠（長4.5cm・径5cm）があり、柱頭両側に頭貫を落とし込む仕口がある。頭貫は柱に落し込んだ状態で検出された。断面長方形（14.2×10.5cm）で、長さは大半が調査区外に出るため不明である。大斗・卷斗には斗尻に円形の穴がある。墓股には下面に方形の納穴（5.5×3.5cm）があり、形状は平城宮東朝集殿前身建物

(唐招提寺講堂) や法隆寺西院経蔵の奈良時代前半の物に似ている。このほか種別は不明であるが、幅7.3cmの角材の端に長方形の銅板(12.9×7.3cm)を銅釘で打ちつけた物が連子窓の東側で検出された。以上の部材は山田寺の物に比して全体に小振りである。

**瓦塊類** 多量の丸・平瓦の他に、軒丸瓦・軒平瓦・垂木先瓦・熨斗瓦・鶴尾・埠仏がある。軒瓦は35点しかなく、しかも8世紀前半以前ないし平安時代に属し、仏堂や回廊に伴うものではない。

SB150建立以前の谷の自然堆積層から7世紀前半、SB150基壇土から7世紀後半の瓦が出土している。

坂田寺出土の軒丸瓦は、これまでの調査で10型式21種あることが知られているが、今回はこのうち8型式11種が出土した(表参照)。このうち、II B型式とIII A型式は今回良好な資料が出土したので図示する。軒平瓦は9型式10種が知られており、今回はこのうち3型式4種が出土した(表参照)。垂木先瓦は2型式5種が知られており、このうち1型式3種が出土した(表参照)。熨斗瓦は3点、鶴尾は2種11点が出土した。埠仏はSD176Bの埋土から1点



出土軒丸瓦(1:4)

| 種別 | 型式    | 数 | 備考       | 種別    | 型式  | 数        | 備考       |
|----|-------|---|----------|-------|-----|----------|----------|
| 軒  | I A   | 3 | 桜花彫單弁10弁 | 軒丸瓦   | VIA | 8        | 善正寺式     |
|    | ID    | 1 | 桜花彫單弁9弁? | VII A | 3   | 複弁8弁     |          |
| 丸  | II B  | 1 | 角端反転單弁9弁 | VII A | 1   | 複弁6弁     |          |
|    | III A | 1 | 円端反転單弁8弁 | 総数    |     | 30       |          |
| 瓦  | III D | 1 | 円端反転單弁6弁 | 軒平瓦   | I A | 2        | 手彫り忍冬唐草紋 |
|    | IV A  | 4 | 重弁8弁     | IV A  | 1   | 6641 C   |          |
|    | IV B  | 1 | 重弁8弁     | IV B  | 1   | 6641 F?  |          |
|    | V A   | 6 | 山田寺式     | VII A | 1   | 川原寺762型式 |          |
|    |       |   |          | 総数    |     | 5        |          |

出土した。方形三尊佛の右脇侍菩薩の首から下を残す破片であり、同原型品が川原寺・同裏山遺跡・橘寺・山田寺・紀寺・南法華寺で出土している。

**土器・陶器類** 土師器・須恵器・施釉陶器がある。土師器は、SC170基壇と重複する部分のSD176B南岸石列の裏込め土から平城Ⅱ、SD171最下層から平城Ⅲが出土した。墨書き土器は、SD171から上師器皿Aの底部外面中央に「中」と書いた物、SD176Bから平城ⅡかⅢの土師器杯皿Aの底部外面中央に「廣万口」と書いた物が出土した。三彩陶器はSD176BやSD171を埋め尽くした堆積層から出土した。27片あり、うち22片は同一個体(瓶)と思われる。他は鉢2片・碗1片・器種不明体部1片である。灰釉陶器はSD171から碗片1点が出土した。他にSB150基壇上の堆積土からフイゴの羽口が1片出土した。

**金属製品** SD171から儀鏡化し内区が独立した海獸葡萄鏡が1点(裏表紙)、SB150基壇上の堆積土から金銅製蝶番が1点出土。このほか鉄釘が12点ある。

**木心乾漆仏** 仏堂上の焼土層から断片多数が出土した。金箔が貼られており、尊名は不明である。

#### まとめ

奈良時代の伽藍中枢の建物と考えられるSB150の規模・構造が確定した。SB150はどの建物に比定できるであろうか。須弥壇が身舎の梁間いっぱいにとらかれていること、桁行が7間であること、基壇が高く軒の出が深いこと、背後(東北側)に別の基壇建物が存在すること、に注目すれば金堂の可能性が強い。ただし、両脇間を除いた正面が等間であること、基壇面が上間床である点から講堂の可能性も捨てきれない。今回の調査で、SB150に回廊が取り付くことが判明したが、これは決め手にならない。この問題については今後の調査の進展を待ちたい。建物の規模は、金堂とすれば興福寺東金堂・陸奥国分寺金堂・上野国分寺金堂、講堂とすれば美濃国分寺講堂などが近い。

SB150の造営年代は、第3次調査で検出した須弥壇の築成に伴う鎮壇具に含まれる銅鏡の年代によって、天平神護元年(765)から、延暦15年(796)の間と考えられている。須弥壇が造営当初のものであれば、天平神護元年が上限とな

る。ただし、須弥壇が改修されていれば、上限がさらに遡る可能性が出て来る。その決定は今後の調査を待たねばならないが、今回基壇版築土から7世紀後半の瓦が出土したので、7世紀前半まで遡らないことは確定した。SB150は第3次調査では焼失したと考えていたが、立ち腐れで倒壊したことが判明した。なお、SB150・回廊とともに檜皮葺の可能性がある。奈良時代の檜皮葺寺院の例には石山院などがある。

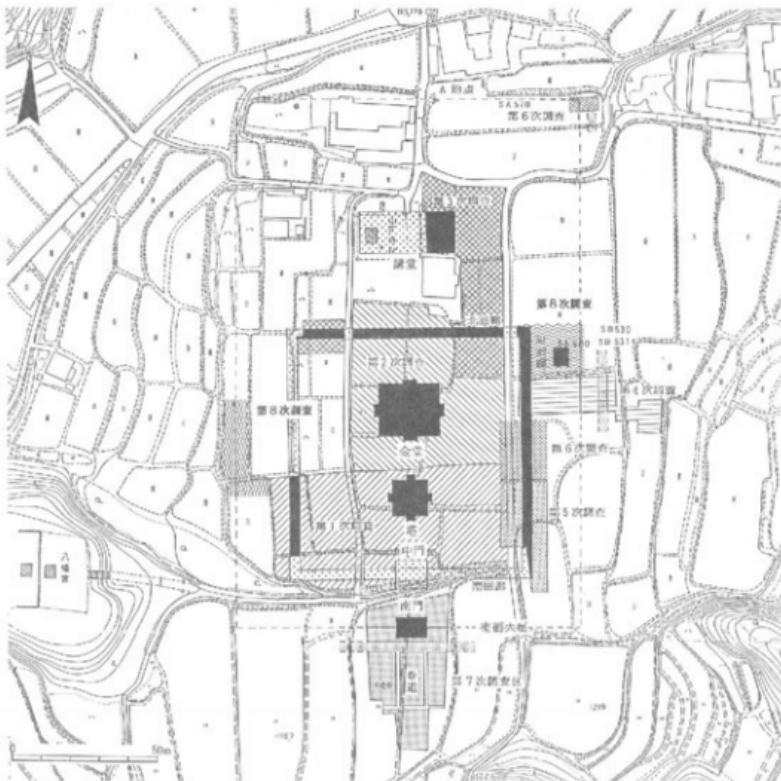
回廊の存在が判明し、位置・規模・構造についての手がかりが得られ、その建設がSB150より遅れることが判明した。回廊の上限年代は奈良時代前半（平城II）である。西面するSB150の西側には回廊に囲まれた一郭が存在し、SB150の両脇に南北回廊が取り付いていたと見られる。SB150の南側ではSC170との間に橋が架けられていた可能性がある。SB150の北側では、第2次調査成果と合わせると、南側よりも南北回廊が短かった可能性が大きい。なぜなら、SC170は長さ約18mであるが、SB150の北側でも18mとすると、第2次調査で検出した8世紀代の高い石垣の北側に出てしまう。この石垣の南側にはかねてより回廊の存在が予想されていたのである。石垣上は後世の削平を受けており、回廊の遺構は検出されていないが、石垣のすぐ南側に北面回廊を想定すると、回廊で囲まれた区画の南北長は約58m（195尺）となり、海龍王寺・甲賀寺程度の規模となる。

今回、伽藍配置についての重要な知見を加えることにより、8世紀後半の坂田寺の様相がいっそう明らかになった。規模は平城京の大寺と比べれば小振りなもの、地方の国分寺クラスであり、立派なものと言えよう。この時期の坂田寺がこれほどの大規模な造営を行えたのは、天平勝宝元年（749）に東大寺大仏殿の東脇侍を寄進した尼信勝など有力な尼僧や後援者の存在を背景に考えるべきであろう。

#### 4 山田寺第8次調査

(1990年8月～12月)

当調査部では昭和51年以来7次にわたって山田寺の塔・金堂・回廊・講堂・南門等伽藍主要部の調査を行ってきた。その結果金堂が特異な柱配置をもつ建物であること、回廊が倒壊した状態で検出され、飛鳥時代の建築様式を知る貴重な資料を提供したこと等、多大な成果をあげてきた。今回はこれまで未確認の寺域西限と回廊の東北隅の2ヶ所に調査区を設け、寺域西限の施設・西門の



山田寺調査位置図

有無・東回廊と北回廊取り付き部の状況・回廊東側の区画その他の施設の状況を解明するために調査を行った。

東調査区は第4次調査区の北に続く平坦な旧水田で、東西25m・南北21mの調査区を設定し、面積は522m<sup>2</sup>、西調査区は金堂のほぼ真西で一筆毎に急激に西に向って低くなる地形の所に東西8m・南北32mの調査区を設定し、面積は278m<sup>2</sup>である。

#### 東調査区の遺構

東調査区の基本層序は耕土・床土・灰褐色砂質土・灰褐色粗砂・黒灰色粘土（地山直上では暗黒灰色、東半部では青白色粘土）・地山（白色粘土）である。検出した主な遺構は、東回廊SC060・東回廊屏风口SX666、回廊東雨落溝SD552、暗渠SX670、宝蔵SB660、宝蔵雨落溝SD661～664、南北塀SA500、基壇状高まりSX535等がある。

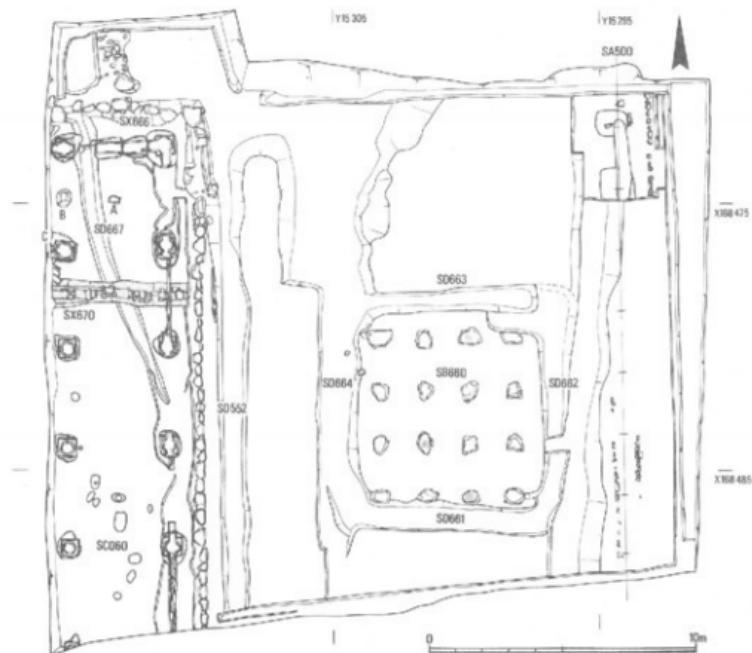
**東回廊SC060** 東回廊の基壇面上には灰褐色粗砂・灰色細砂が30～40cm積り、特に灰褐色粗砂中には瓦が大量に含まれていた。回廊廃絶後、同廊の東南方向から東側柱の北から3間目を抜けて基壇上を北方へ流れる流路SD667があり、これによって大量の砂がもたらされ、またそのために東回廊北端部では建築部材の残りがよくなかったと考えられる。砂層の下の基壇土直上に暗褐色土が薄くかぶり（最大10cm）この面の上にも瓦が敷かれたような状態で貼り付いていた。ある時期基壇面の化粧に瓦を敷いたのであろうか。

**基壇** 東回廊については第4・5・6次調査で平面・基壇の構造・建物の構造などが判明している。今回は東調査区の西半で東回廊の北端部5間分を検出した。東回廊は発掘区北端で曲って北回廊に繋がる。回廊の基壇・建物の規模・構造はこれまでの調査の成果と特に異なる点はない。回廊は単廊で、柱間寸法は桁行・梁行共3.8m（高麗門で10.5m）、外側（東側）の柱筋のみ壁・連子で閉じている。礎石は花崗岩製で、円形の造り出しがある。東回廊南半部で顕著に見られた蓮華座はわずか2、3個の礎石に認められたのみで、遺存状態は悪い。外側の礎石には地覆座を作り出し、礎石間は棟原石の地覆石（幅25cm、長さ40～50cm）でつなぐ。ただし北から4間分の地覆分は抜き取られている。なお木製地覆は北から2・4・5間目に残っており、5間目の遺存状況が最も良い。

回廊基壇は幅6.4mで、柱心からの基壇の出は1.3m弱である。ただし今回の調査区では西の側石は一部で東側の面を確認したに留まり完全には西の基壇縁までは検出していない。基壇縁には長さ40~70cm、高さ30cm程度の花崗岩または安山岩の自然石を一段並べて縁石としている。縁石の裏側の幅25cmに縁石据え付けのための裏込土を入れているが、この中には瓦がかなり混っており、縁石はある時期据え変えられている可能性がある。なお東側北端間と北側の側石は崩壊して倒れているものが多い。

基壇築成は、地山を削り出した上に30cm弱の高さに砂質土を互層に積み上げ、その段階で礎石据え付け掘形を掘り、根石を用いず礎石を据えた後再び基壇を積み上げている。

東回廊・北回廊には、側柱列及び棟通りの柱間のほぼ中央に柱掘形があるこ



山田寺東調査区遺構配図

とが従前の調査で知られている (SX062・064・066)。今回の調査ではこの掘形は検出できなかったが、北端の間で 2ヶ所（棟通りの隅 A と北回廊の東から一間目の柱筋の棟通り B）小さい礎石を検出した。位置的には上記の掘形と対応すると思われる。礎石は A が樺原石の切石、B が安山岩である。前者は地覆石と同じ寸法であるから地覆石として用意した石を転用したか、一旦据え付けた地覆石を抜き取って転用したかいずれかの可能性がある。また入限の礎石の西に接して A と同様の切石 C が礎石をつなぐように置かれて居る。これは北回廊の東から 5 間目でも検出されており、回廊内側の地覆石になるものである。これら A・B・C の 3 個の礎石は一連のものと考えられる。北回廊の内側柱に部分的にせよ地覆石の並んでいること、棟通りにも礎石のある (A) ことから考えると、少なくとも北回廊は内側も壁などで閉じられていて、東回廊では床が張られていた時期があったとも考えられる。そして東回廊側柱列及び北回廊の側柱列と棟通りの柱間の中央にある柱穴も、位置関係からすればこれ (A) と一緒に床を張るために根太受けの礎石と見ることができる。ただし従来の調査の所見では SX062・064・066 は基壇築成後で外側の柱列の地覆石を抜き取る以前に掘られたとされている。地覆石のある状態でその下に穴を開くことはできないから、地覆石を掘る前にこの穴が掘られたこととなり、その場合床張りの時期が古くなりすぎてしまう。柱穴と今回検出の小礎石とは時期が異なるのであろうか。

扉口 SX066 北回廊の東端間にには通常より大きい（幅 40cm、長さ 1m）地覆石 3 個を並べており（但し 1 個は後世の流路に当っており、抜かれている）、その内の東端のものには扉の軸摺穴（径 9cm、深さ 4cm 以上）が穿たれており、回廊の背面側に向って出入口が開くことになる。扉は内開きである。軸摺穴には鉄板が置かれていたが錆び付いて取り出す事はできなかった。西側の軸摺穴の位置は当該地覆石が抜き取られているため正確にはおさえられないが、柱との位置関係が東側と同じと仮定すれば東西の軸摺穴間心が 2.2m となり、東回廊の北から 12 間目で確認されている扉口と比較すると、約 20cm 広いことになる。また 12 間目の扉口の地覆石の地覆座は礎石際は礎石地覆座と同じ幅として方立部分から幅を広げているが、今回検出の扉口では地覆石は礎石際から直ちに幅を広げており、

構造がやや異なる。扉口を出た北側は基壇化粧の崩壊が著しいが、階段が設けられていた形跡はない。

雨落溝SD552 東回廊の基壇縁から50cmの幅をあけて南北溝SD552がある。幅1m、深さ25cmの素掘で、ほぼ東回廊全長に沿って設けられている。但し北端から2間目で浅くなつて東肩が不明瞭になり、東北方向への流路となつて溢水している。因みに従前の調査の所見通り北回廊には北雨落溝はない(第3次調査、概報10)。溝の埋土は2層に分かれ、下層は青灰色粗砂、上層は黒灰色粘質土である。

暗渠SX760 東回廊の北から2間目に榛原石の板石に瓦を混じえて組んだ暗渠がある。この暗渠は北回廊の南雨落溝の延長部にあたり、東方への排水の施設と考えられる。基壇築成後、幅0.7~1mの掘方を掘り、底に幅30cm、長さ50cm前後、厚さ6cm程度の板石を敷き、その上に高さ約20cm、長さ40cm、厚さ6cmの側石を立て、底石とほぼ同寸法ながらやや不整形の蓋石をのせて、石の隙間に瓦片を置いて暗渠を構成している。暗渠の内径は幅18cm、深さ20cmとなる。西端の蓋石だけは巨大な軒平瓦を用いており、その西端部の瓦当が東回廊の西侧石裏側に接していた。回廊造営当初に作られたものと思われる。

今回の調査区では倒壊した回廊の部材はごく少く、基壇上に地覆が3本、東雨落溝に大斗・肘木・垂木各1個があったに過ぎない。

宝蔵SB660 東回廊の東に約6mの間を置いて方一間に礎石が並ぶ。後述のようにこれは宝蔵の礎石と考えられる。柱間は東西1.7m(5.5尺)、南北2m(6.5尺)の等間で、しかも総柱である。従つて南北棟の高床の蔵と見られる。礎石は自然石で多くは上端を平坦にして使っている。この内4個の礎石上面には柱のあたりがあり、柱径は30cmと知られる。四周に雨落溝がめぐらしく基壇状を呈するが、実際には周囲の地盤面と基壇面の高さの差はほとんどなく、礎石上面で約25cm高いにすぎない。礎石の据え付け方は、白色粘土の地山面上に乳白色粘質土を積みながら礎石を据え付け掘形を掘らずに据える。この際、乳白色粘質土は礎石の回りのみ円形の丘状に積んで盛り上げる。さらにその上に暗青灰色砂質土を積んで基壇を形成するのである。ただ基壇を断ち割った状況から見ると、乳白色粘質土を積む前に地山面を掘りこんで深さ20cm以上の穴が掘られており、

その中には瓦も混じっている。この穴は古い礎石据付け穴で、ある時期に礎石を地上げしている可能性がある。暗青灰色砂質土に含まれる上器からその時期は9世紀末から10世紀初頭と考えられる。藏の地上げは唐招提寺でも知られる。

雨落溝SD661～664 磚石心から約80cmあけて四周に雨落溝がめぐる。幅は1～1.5m、深さ20cmで、護岸施設はない。柱心から溝心まで、桁行・梁行共約1.5mである。西北隅では北に向って溝が流れ出し、東回廊東雨落溝から東北方向へ流れる流路と合流している。この雨落溝は埋土が上下二層に分かれ、上層は黒灰色粘質土、下層は黒灰色砂質土で、上層は溝の周辺まで広く広がっている。上層の埋土中には大量の木簡・木製品・建築部材、少数の金属製品が含まれており、基壇面にも若干の木簡・木製品・金属製品が落ちていた。建物廃絶時に建物やその内蔵物が周辺に散乱して埋もれたと見られる。これらの遺物には経軸・仏具・経帙の題籤があり、それらがこの建物の収納物と考えられるところから、この建物は経典・仏具などを収納する宝蔵と考えられる。

東限の築地・堀SA500 回廊基壇から約14mあけて南北に基壇状の高まりが続く。これは第4次の調査区でも検出されており、基底部幅は約5m、上部で約2mあり、上面に築地基底部と思われる1m間隔で並ぶ瓦列がある。この基壇の西側には瓦敷きの整地面があり、西へ向ってやや傾斜しながら回廊近くまで至る。発掘区北半部では特に瓦敷きが顕著である。

この基壇状の高まりは平安時代後期に築かれているが、それまでにも何度も互に亘って整地され徐々に高くなつていったものらしく、部分的に石や瓦の並ぶ層がある。

この整地を取ると掘立柱の南北堀SA500が検出される。これも第4次調査で検出されたものの北の延長にあたり、今回は一間分のみを検出している。柱間寸法は4次調査検出分も含めて約2.3mとみなすことができ、柱掘形は一辺1.2m程度である。湧水が著しく明確には解らないものの、後述の西限の堀と同様、2倍分の柱を一体にした抜取り穴があり、改修されている可能性がある。

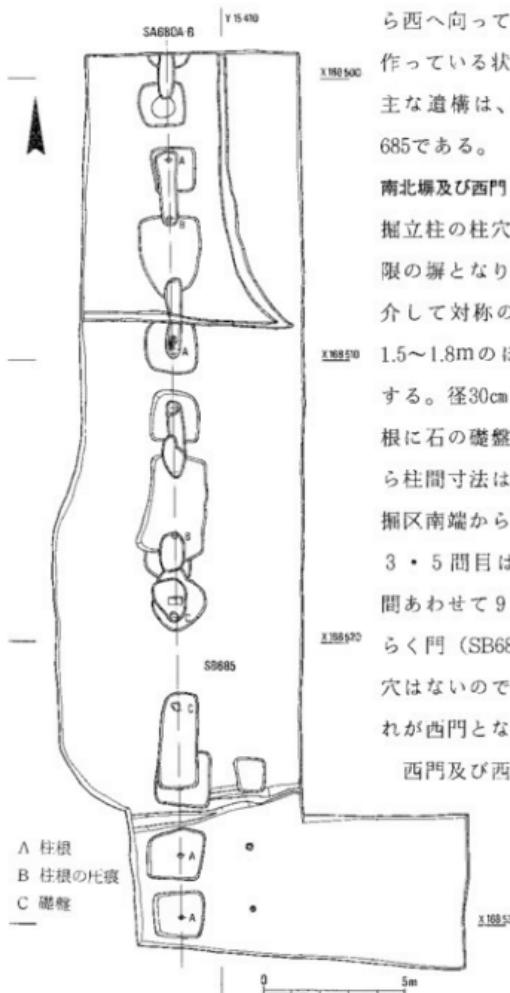
## 西調査区の遺構

西調査区の基本層序は耕土・床土・黄褐色砂質土の遺構面となる。遺構面は西に向って傾斜しており、深さ1m以上の整地土である。調査区南端では東か

ら西へ向って土を流し込んでは平坦面を作っている状況がよく見られた。検出した主な遺構は、南北塙SA680A・B、西門SB685である。

**南北塙及び西門** 発掘区のほぼ中央を南北に掘立柱の柱穴が一列に並ぶ。これが寺域西限の塙となり、東限の塙とは伽藍中軸線を介して対称の位置にある。柱掘形は一辺1.5~1.8mのほぼ方形で、深さは2mに達する。径30cmの柱根が残っているもの、柱根に石の礎盤を置くものがある。これらから柱間寸法は2.25mと知られる。ただし発掘区南端から3~5間目は柱間寸法が広く、3・5間目は2.85m、4間目は3.25m、3間あわせて9mとなる。この3間分はおそらく門(SB685)であろう。ただ柱の柱穴はないので、3間の棟門と考えられ、これが西門となる。

西門及び西門より北の掘立柱塙は原則として隣あう2本の柱を一体の抜取り穴を掘って抜き取っている。その後抜取り穴を掘形として再度柱を立てている。柱位置はほとんど変わらない。こうした建て替



山田寺西調査区遺構配置図

えは南門両脇の掘立柱塀でも行われている。

西門及び西限の掘立柱塀の造営や改修の時期を示す遺物は出土していないが、南面の塀・門の建立・改修等と一連の工事と考えよう。ただ南門両脇の塀は最終的には築地に改修されているが、今回の西限の塀ではその有無を確認することはできなかった。

## 遺 物

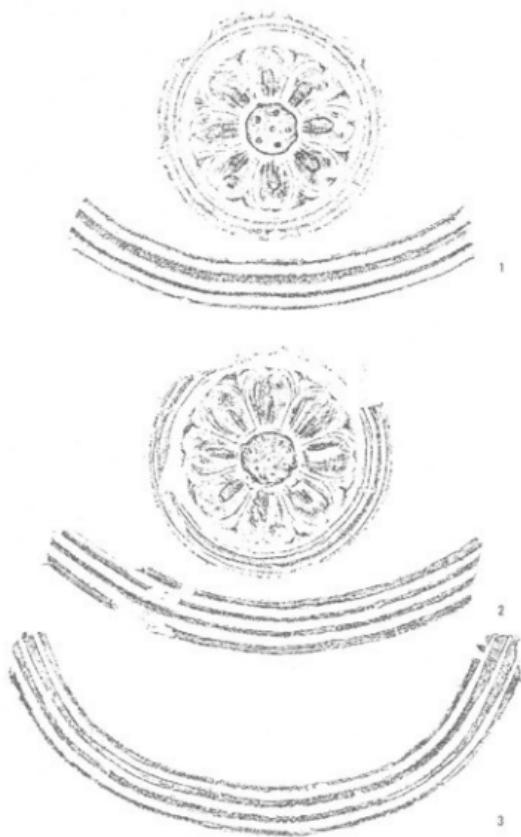
西調査区からは僅かな瓦・土器を除いてほとんど遺物が出土しなかった。東調査区からは、回廊基壇上から多量の瓦が、回廊東雨落溝からは多量の瓦・少數の建築部材・土器が、宝蔵の雨落溝及び其壇面からは大量の木簡・木製品・建築部材・金属製品が出土した。また宝蔵北方の整地上中からも多量の瓦が出土した。

**瓦類** 丸・平瓦をはじめ多量の瓦類が出土した。その内訳は軒丸瓦145点、軒平瓦292点、垂木先瓦116点、面戸瓦8点、鷲尾5点と丸・平瓦1600袋以上などである。3月末現在の整理による種別出土点数を次表に示した。

軒丸瓦はいずれも單介8弁蓮華紋の「山田寺式」で、A～Fの6種に分かれうるうち、今回はA・C・Dが出土している。軒平瓦はすべて重弧紋で、三重弧5点のほかはすべて四重弧である。軒丸瓦Dと四重弧紋軒平瓦Aの組み合わせ(1)が回廊用と考えられており、その次に多い軒丸瓦Cと四重弧紋軒平瓦Fの組み合わせ(2)が、出土状況からみても宝蔵所用と判断できる。

今まで山田寺において出土した面戸瓦は、丸瓦を焼成後に打ち欠いて作ったものであったが、宝蔵に伴う面戸瓦が成形段階から面戸用に製作してある点が注目される。

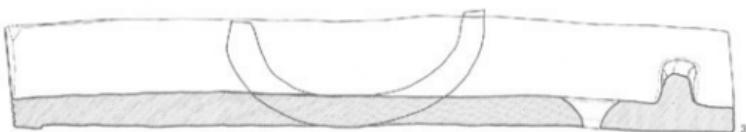
四重弧紋軒平瓦の形をとった長大な瓦が1点ある(3)。東回廊北部の基壇内を通る暗渠の蓋に転用されていたもので、長さ101.5cm、最大幅37cm、端部から7cmの所に高さ4cm、幅4cmの堤を設け、その内側に直径8cmほどの円孔を穿ってある。通常の軒平瓦より、彎曲度が強く、しかも瓦當に向かって右側の方が比較的直に近く立ち上がる。蝶羽に用いた「掛け瓦」と考える向き



山田寺出土軒瓦拓影（1：4）

|                  |                | 点数  | 百分率 |
|------------------|----------------|-----|-----|
| 軒<br>瓦           | A              | 10  | 7   |
|                  | C              | 38  | 26  |
|                  | D              | 70  | 48  |
|                  | 不明             | 27  | 19  |
|                  | 合計             | 145 | 100 |
| 軒<br>重<br>平<br>瓦 | A              | 99  | 34  |
|                  | B              | 30  | 10  |
|                  | F              | 93  | 32  |
|                  | 不明             | 65  | 22  |
|                  | 三重弧            | 5   | 2   |
|                  | 合計             | 292 | 100 |
| 垂<br>木<br>先<br>瓦 | A              | 16  | 14  |
|                  | B              | 10  | 9   |
|                  | C <sub>b</sub> | 8   | 7   |
|                  | D              | 64  | 55  |
|                  | 不明             | 18  | 15  |
|                  | 合計             | 116 | 100 |
|                  | 鰐尾             | 5   |     |
| 面                |                | 8   |     |

山田寺出土瓦集計表



大瓦実測図（1：8）

もあるが、その用途についてはまだ検討の余地がある。掛け瓦として製作したもの、あまりにも重すぎるので実用にならなかったとするのも一考であろう。

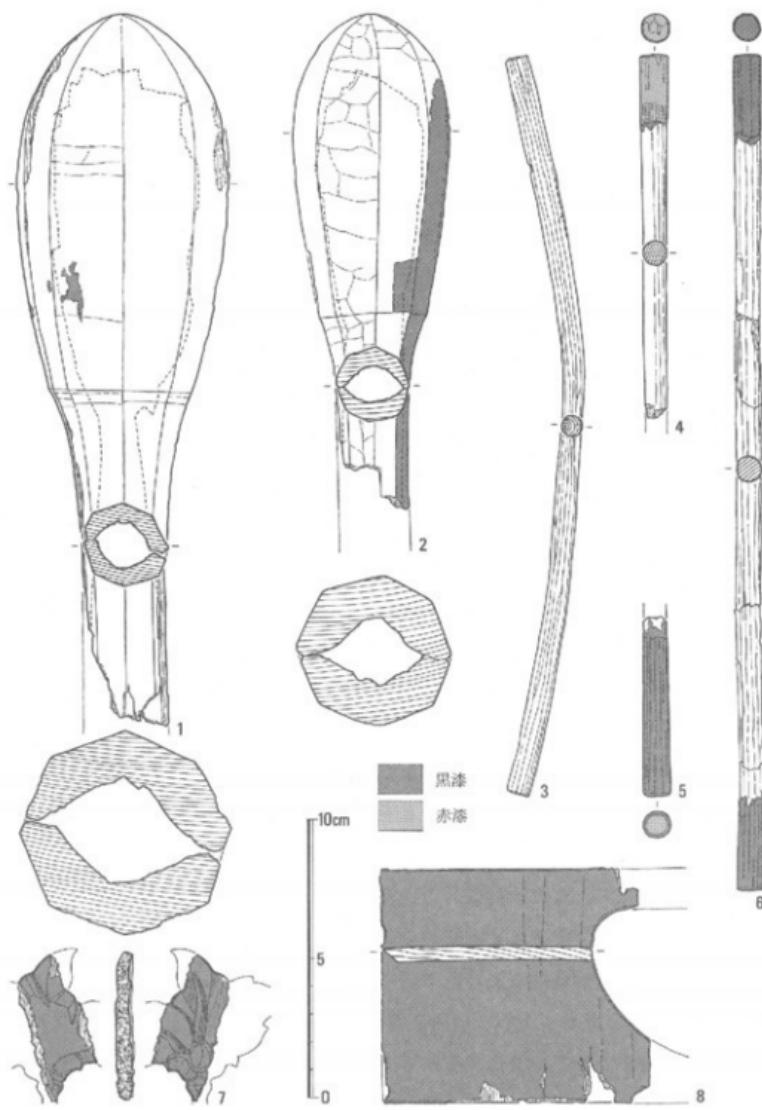
**土器** 出土土器には土師器・須恵器・黒色土器・瓦器の他に多量の施釉陶器がある。施釉陶器には二彩の多嘴壺、縁釉の皿・盤、灰釉の壺、白磁の碗がある。土器は大半が平安時代のものである。宝蔵雨落溝からは9～11世紀前半の土器が、基壇土からは9世紀後半の土師器が出土した。また回廊雨落溝出土土器は11世紀前半の土師器皿が最も新しく、瓦器は含まれない。

**木器・金属器** 出土した木器には、漆塗及び素木の軸、漆塗函、漆塗の脚、漆塗厨子の扉、漆塗の茄子形仏具、漆塗の宝相華葉形仏具、八角台座、漆塗の華瓶形仏具等がある。台の足には奈良時代のものと平安時代のものがある。

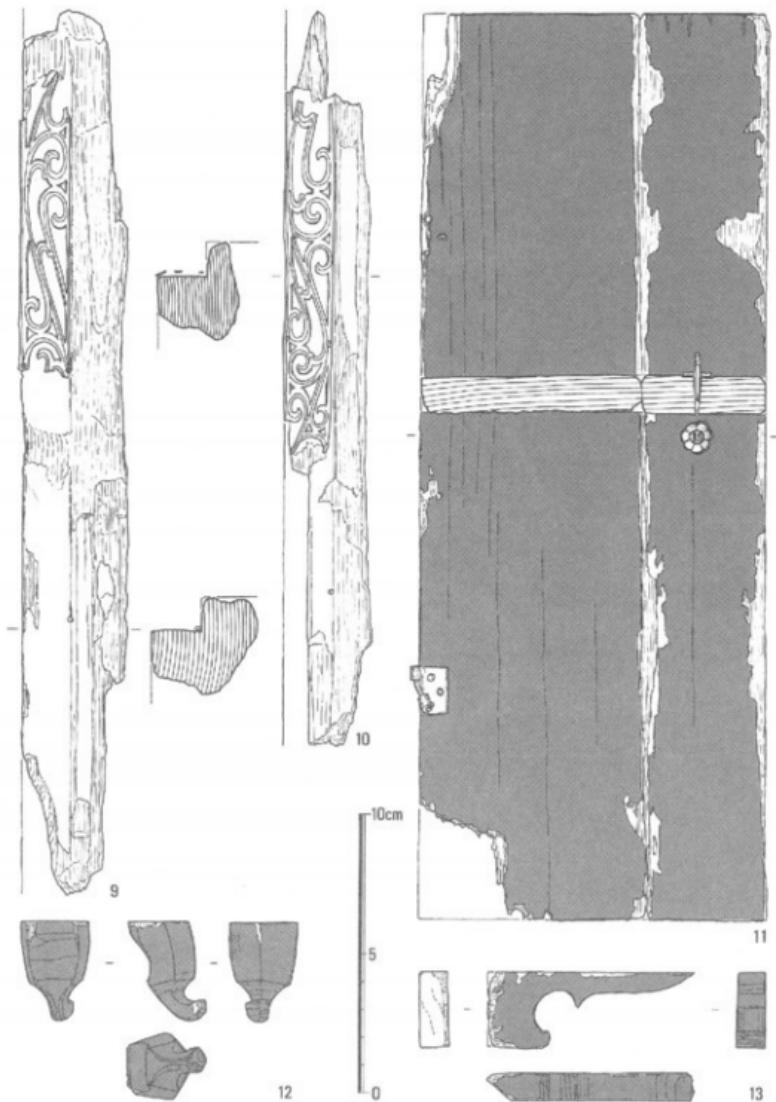
金属器には銅板五尊像・押出仏・唐草文透影金具（木枠付）・六弁蓮華飾金具・厨子扉の座金具と蝶番・釘等がある。銅板五尊像は、縦4.5cm、横3.7cm、厚さ0.25cmで、唐代の作品と考えられる。白鶴美術館に同型品3点があるが本品の方が仕上がりがよい。

建築部材としては、回廊に関わるものとして、地覆が3本、東雨落溝に大斗・肘木・垂木各1個があったに過ぎない。ただし垂木は明らかに反り増しがあって、これが当初材とすれば飛鳥時代の垂木に反り増しがあることになり、取り替え材とすれば、かなり大がかりな修理があったことになる。宝蔵からは明らかな建築部材としては茅負5点が出土している。隅の留めに切った部分もあり、宝蔵が入母屋造か寄棟造であったことを示している。茅負に近接して軒丸瓦Cと四重弧紋軒平瓦Bの軒瓦が散乱しており、この組み合せの軒瓦が葺かれていたことが知られる。ただ茅負以外の建築部材が全くと言っていい程見あたらぬのは不審である。宝蔵はまず軒から落下し、軸部はなおしばらく健在であったために、その部材が持ち去られて他に転用されたことも想定できよう。

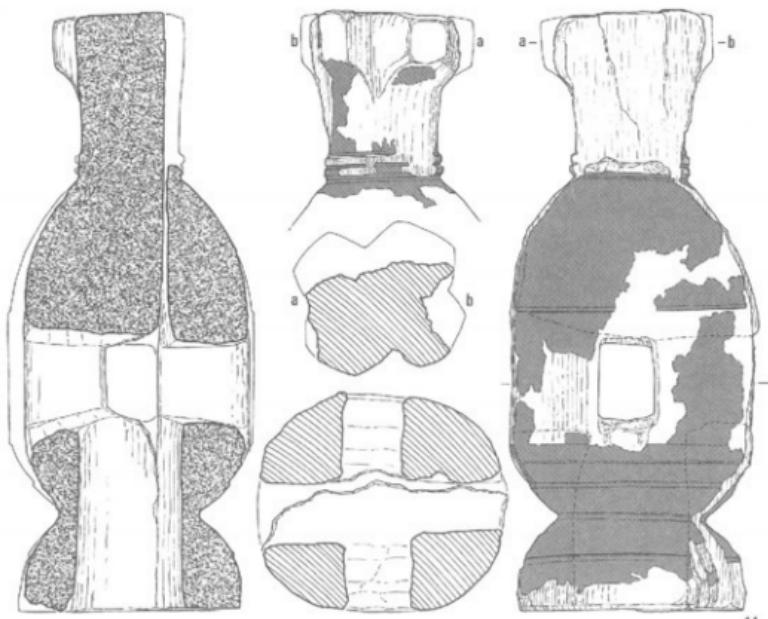
**木簡** 宝蔵基壇上面から1点、同雨落溝から6点の木簡が出土した。釈文は85頁に掲げる通りである。①は宝蔵基壇上面から出土した経帙の題籤で、石川年足が天平11年7月に書写させ、「浄土寺」に安置した大般若経六百巻に付けられていた可能性が高い。①から④は、宝蔵での経典の出納に関わる木簡と考え



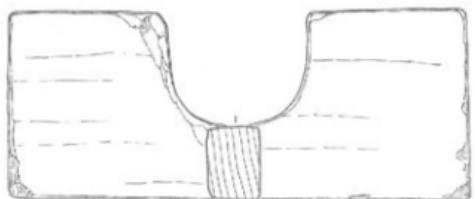
出土木器① (1・2: 茄子形仏具, 3: 素木経軸, 4~6: 漆塗経軸, 7: 宝相華葉形仏具, 8: 脚)



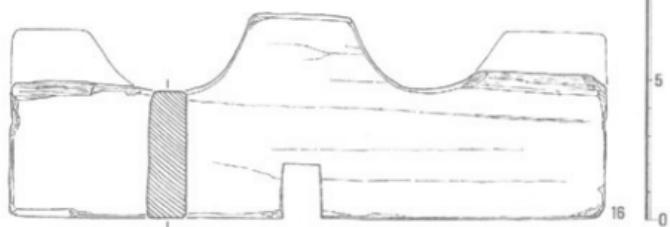
出土木器② (9・10: 唐草文透影金具付厨子, 11: 厨子扉, 12・13: 脚)



14



15



0

5

10 cm

出土木器③ (14: 草瓶形仮具, 15・16: 部材)

① 経第廿二帙

卷之二十一

$$\begin{array}{r} \text{---} \\ \text{---} \\ \text{---} \\ \text{---} \\ \text{---} \end{array}$$

られる。③から山田寺の三綱の名前の知られること、②から出納の管理に「倉人」があたっていたことが知られること、④は貸借状況のチェックが行われた記録であるらしいこと等、奈良時代後半から平安時代初期の山田寺の組織や活動の一端が窺える貴重な史料である。

#### まとめ

回廊については北端に扉口の付くこと・垂木に反り増しのあること、が新たな知見として加わった。回廊の建物については従来、地覆石を9世紀前半から中頃に抜きとて、不同沈下を防ぐために瓦・礫等を詰め込んでおり、地覆石の抜き取りは腰壁の改修に伴うものかとされてきた。しかし腰壁を改修するためにわざわざ地覆石を抜き取る必要は必ずしもなく、そのことによって建物の足元が弱くなるのは明白であるから、甚だ不審な仕事と言わねばならない。このような足元の大改修があったならば、建物も解体されないままでいたかどうか疑問が生じてくる。建築部材の再検討も含めて今後の課題である。

宝蔵の発見も、初めて山田寺の僧侶の生活に關係する施設を見出した点で重要なものであった。『多武峰略記』には経蔵跡の記載があるが、今回検出した建物がその経蔵にあたるか否かは解らない。しかしその内容物・出納の実態などが知られた点は貴重である。宝蔵はその所用瓦から7世紀後半の創建で、回廊等と同様10世紀末には廃絶していたと考えられる。

西限の塀の検出により、伽藍を構成する区画がほぼ確定したと言ってよい。その規模は東西118m、南北187m、となる。西門は3間の規模ではあるが棟門程度の簡略なものであった。なお東限の塀の東にはなお寺の関係施設の存在が想定されており、今回は調査が及んでいないが西限塀の西にも寺関連の施設がないとはいえない。その意味で寺域の広がりについてはなお不明とせざるをえない。

## 5 その他の調査概要

### A 石神遺跡1990-1次調査

(1991年1~2月)

この調査は農小屋新築に伴う事前調査として、明日香村飛鳥で行ったものである。調査地は、石神遺跡第2次調査区（概報13）に北接する水田である。調査区は、最終的に南北6.5m・東西9mになった。層序は、上から耕土・床上で、南半ではその下がすぐ黄褐色砂質土の地山、北半では約10cmの暗褐色土があいだに挟まる。遺構の検出は黄褐色砂質土の上面で行った。

7世紀中頃の遺構 挖立柱塀と溝がある。

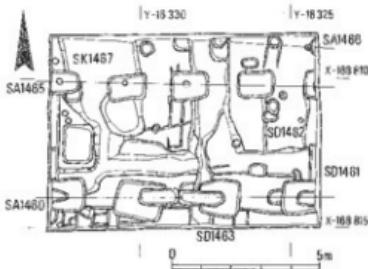
SA1460は、東西に伸びる掘立柱塀で、3間分（8.0m）を検出した。柱間寸法は約2.67mである。柱掘形は一辺1.0~1.5mで方形を呈し、深さは現状で約0.7m、柱はどれも抜きさられていた。なお2つの柱穴に対して、その真中から2方向に伸びる抜取り穴を掘って柱を抜いている。

SA1465も、東西に伸びる掘立柱塀である。4間分（8.4m）を検出した。直径25cm前後の柱痕跡がみつかっており、柱間寸法は2.1mである。柱掘形は一辺0.8~1.3mで、東西に長い長方形を呈す。深さは、現状で約0.6mである。

SD1461は、幅約2.4m、深さ約0.5mの素掘りの東西溝である。一部が中世の溝と重なっている。埋土は、暗茶褐色土・山土混茶灰褐色粘質土で、水の流れた形跡はない。なお重複関係から、塀SA1460抜取り→溝SD1461の順につくられている。

7世紀後半の遺構 SK1467は南北3.5m以上・東西約2.5m・深さ0.3mの十坑である。埋土から遠江産の平瓶のほか、飛鳥IV期の土器が出土した。

このほかに、古墳時代の小穴、中世の塀SA1466・溝SD1462・1463などを検出した。



石神遺跡1990-1次調査遺構配図

・本調査区では、大きな柱穴が密集してみつかった。これらが壇の柱穴ではなく、建物の一部の可能性もある。周辺の調査の進展に待ちたい。

#### B 飛鳥寺1989-5次調査

(1990年2月)

この調査は住宅の増改築に伴う事前調査として、明日香村飛鳥で行ったものである。調査地は飛鳥寺講堂の東北方にある。1.7×5.3mの南北トレンチ調査の南三分の一付近で地山の下がりを検出した。埋土に瓦片を多数含み、あるいは東西溝の北半の可能性もある。

#### C 山田道周辺1990-1次調査

(1990年4月)

調査地は奥山久米守南方約250mの位置で、「山田道」推定地にあたる。調査は東西2m・南北3.5mの調査区を設定して行った。地表下約0.7mの明灰褐色土の上面で中世の南北小溝4条と土坑1基を検出したが、山田道に関連する遺構は確認できなかった。

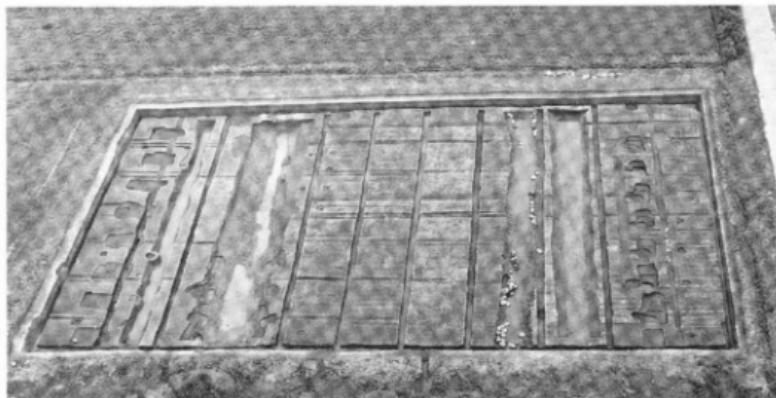


写真1 内裏東外郭・東方官衙地区（第61次）（南から）



写真2 西方官衙地区（第63－8次）（東から）

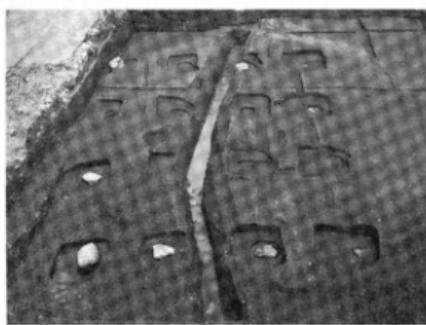


写真3 藤原京右京七条一坊西南坪（第63－6次）（南から）

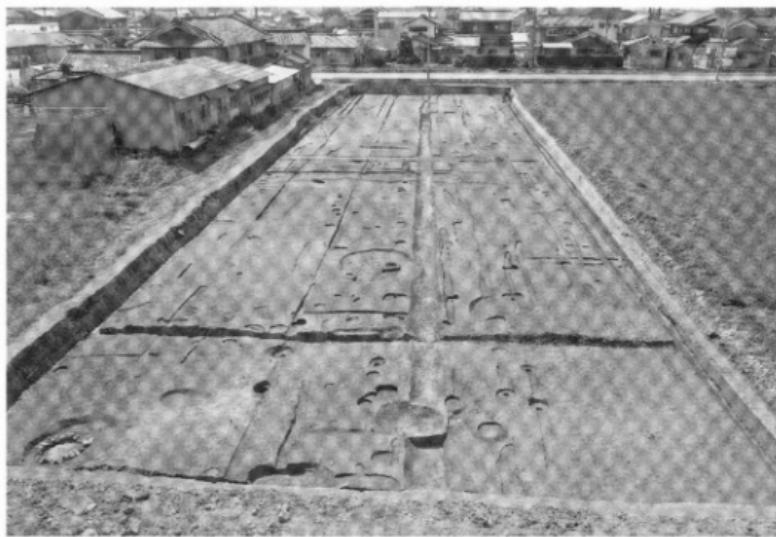


写真4 藤原京右京七条一坊西北坪（第63次）（東から）



写真5 藤原京左京四条三坊（第63—7次）（西から）



写真6 本藥師寺金堂北雨落溝（北から）

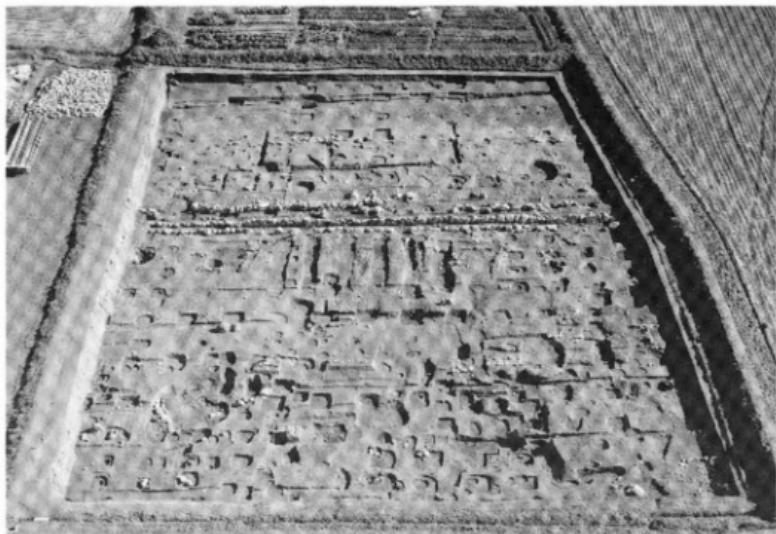


写真7 石神遺跡第9次調査区（西から）



写真8 山田道第2次調査暗渠（北から）



写真9 石神遺跡石組溝（北から）



写真10 坂田寺第6次調査区（東から）



写真11 坂田寺回廊部材遺存状況（南から）



写真12 山田寺第8次東調査区宝蔵（東南から）

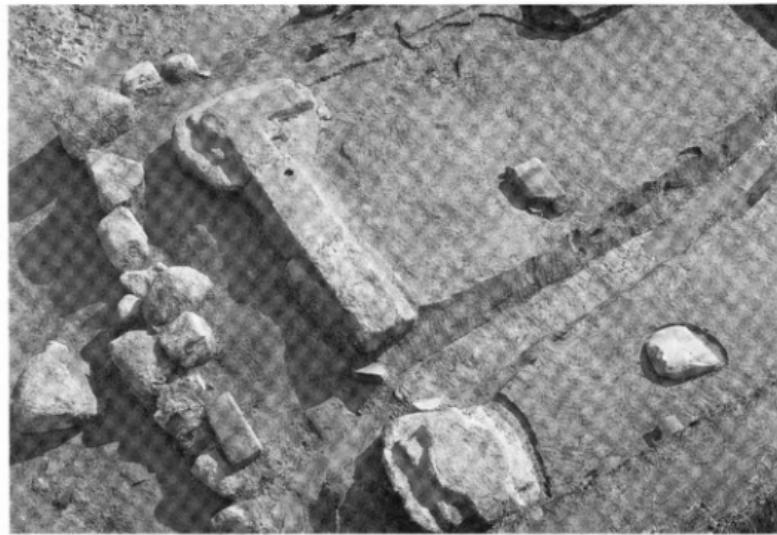


写真13 山田寺回廊東北隅屏口詳細



写真14 山田寺出土銅板五尊像



写真15 山田寺第8次西調査区（北から）

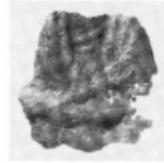


写真16 押出仏（原寸）



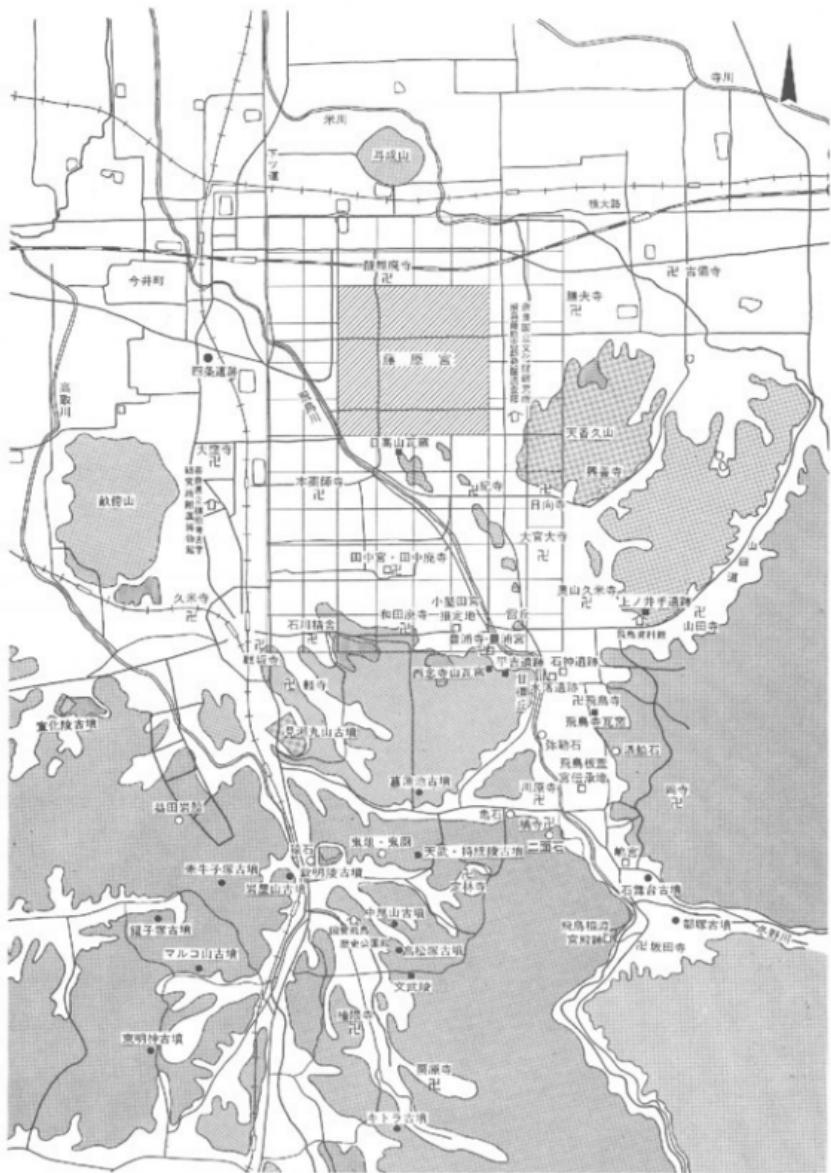
写真17 六弁蓮華文飾金具（原寸）



写真18 唐草文透形金具付き扇子



写真19 漆塗茄子形仏具



## 飛鳥・藤原地域の遺跡（1：40000）



飛鳥・藤原宮発掘調査概報 21

1991年5月8日発行

編集  
発行：奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

〒634 横原市木之本町宮ノ脇

Tel 07442-(4)-1122

FAX 07442-(4)-1742